

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和七年五月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十四卷 第二号（通巻二七八号）

万象

B A N S Y O

五月号

2025. 5



五月の句

桐咲ける蚕糞こふんに湿る藁草履

野崎ゆり香

桑の葉だけを食べて成長する蚕。その糞は飼料や肥料として利用される他、漢方茶にもなっている。自註には、「桐の花の咲く頃は、春蚕が一段落ついて夏蚕になり、蚕糞のしみた藁草履は重くなる」とある。そこには蚕の世話に流した汗も染みているだろう。養蚕と和紙漉きが盛んな埼玉県小川町で医業を営むゆり香先生の、藁草履で働く人人に寄り添う姿勢、家蚕の一生を見つめる視線が伝わってくる。高みに咲く桐の花が、蚕と共にある暮しを静かに讃えている。昭和47年の作。

（三村紀子）

令和七年

五月号

万象

BANSYO

泉

岡の麓に泉がある。
その泉の深さは極まるが
湧き出る水は極まり知れぬ

井伏鱒二『厄除け詩集』より

万 象

令和7年5月号

主宰作品 春の雲……………江見悦子 4

万象の窓³⁸ 東京大空襲……………江見悦子 5

名誉顧問作品 つちふる……………小林愛子 6

風音集

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子
榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子……………7

風音散歩³⁰ (五月号)……………小林 愛子 10

同人作品

江見悦子選……………11

同人作品の佳句……………江見悦子 31

同人会だより

小さな吟行句会……………榎本 文代 32

3月の「万象」オンライン同人句会高ポイント

佳句佳句しかじか 同人作品鑑賞 (三月号)……………松原智津子 34

特別作品評 (三月号)……………編 集 部 36

私のこの一句……………前田貴美子・榎本 文代・松原智津子 37

新同人競詠作品評

江見悦子……………38

珈琲ぶれいく⁶⁰……………40

北から南から 佐倉——豆知識

(千葉)

三屋 英俊

41

内海良太名誉主宰を悼む

江見 悦子
小林 愛子・中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正
松原智津子・大木 茂・中條 睦子・前田貴美子
沢辺たけし・内田 郁代・中嶋 久登・三屋 英俊

内海良太の百句

編集部抄

52

薄荷飴日月譚 (不定期掲載) 行く秋や良太と拾ふ小さき骨

中村 千久

55

温故知新 (俳句界) (2025年4月号より転載)

江見 悦子

56

続・風のしをり ⑰ 子規と私 (四) 細見綾子

編集部

58

万葉の抒情 ② 『万葉集』にたずねる抒情の源流 ②

橋本 清

59

万象ノオト「靴下」

宜野 顕・加藤 和子・稲川 清子
鈴木美根子・入山 繁幸・立原千代子

60

巻頭作家 (四月号) プロフィール 入河大河 (松山)

内田 郁代

62

万象作品

江見悦子選

63

万象作品の佳句

江見 悦子

74

新中央句会報 (2月例会)

76

ルビーの小函 (五月号)

編集部・校正担当

79

東西南北

80

春の雲

江見悦子

(主宰)

山の端に触るる黒雲春遅遅と
戦災誌の束や三月十日来る
付台の葉蘭に白魚ひとにぎり
多摩川の春のきららを渡り来し
ほきほきと搔く捨て畑の花菜かな
幼子の最初の一步春の雲
初桜泥田の空の明めり

東京大空襲

江 見 悦 子

今年は、昭和20年3月10日の東京大空襲から80年目の年となります。10日の未明、アメリカ軍による無差別爆撃によって、東京の下町一帯は焼け野原となりました。

江東区に「東京大空襲・戦災資料センター」があります。長年気にかかっていたこの場所を、春北風の日、訪ねることが出来ました。私の家族の歴史となる話を読んで下されば幸いです。

当時大学生だった私の父は、両国の鉄工場に勤労働員で派遣されていました。工場の寮は、両国橋たもとの「ももんじや」の近くにあり、他の学生たちと一緒に寝起きしていました。その夜、焼夷弾による火災を消そうと頑張ったようですがとても追いつかず、諦めて両国橋に出たところ、千葉方面に向かって焼け出された人びとが橋を渡っていました。一様に鍋釜を両手に提げていたのが不思議だったとか。赤ん坊を負っていた母親のねんねが燃えていたのを、あわてて消した場面もあり、向かった先は、荷物を預けていた友人の下宿先でした。文京区の茗荷谷まで歩いて帰った朝、実家に戻るために荷物をまとめていた専門学校の女学生がいました。それが母との初めての出会いでした。その後3年後に結婚、翌年の3月10日に私が生まれました。

この話を知ったのは、90歳近くになっていた父の聞き書きをしていた時のこと、ドラマチックな展開に大いに驚きました。

訪れたセンターで先ず目を射たのは、大きく伸ばされて赤く塗られた、空襲直後の「初期火災地図」と、アメリカ軍が撮影した4月2日の航空写真でした。約300機のB29爆撃機が大量の焼夷弾を投下し、約10万人が犠牲となり約27万戸が焼失しました。空き地の目立つ4月2日の写真から、それがよく分かります。空襲時の避難を禁じ、消火を義務付けた「防空法」によって、逃げ遅れた人が相次いだそうです。今では到底考えられない法律ですね。

民間募金によって2002年に建てられたこの施設の目的は、空襲や戦争による民間人の被害を明らかにし、伝えていくことにあります。亡き両親につながる東京大空襲について、もっと深く知らねばと思い、入口の白梅が開き始めたセンターを後にしました。

つちふる

小林 愛子

(名譽顧問)

枯草のなほちりちりと枯れ切つて
追悼文空也と書けばかげろへる
アボカドと花葉に垂すバルサミコ
弔電を打つやはらかき春の闇
逝かれたる後の六日や梅真白
クロツカス地に並び浮く通院日
蠶やバナナの皮にかすも増え

春 来 り

中 村 千 久

(編集人)

眉ふとく引く如月の女かな
 パンドラの匣は空つぽ冴返る
 春シヨール小さきあくびを包みたる
 永き日や顔をはみ出す大欠伸
 民宿の効かぬりモコン春炬燵
 さざ波のひかり散して春来り

梅 探 る

福 島 せ い ぎ

(顧問)

日の底に食へぬ海鼠のはびこりぬ
 寒釣の日あたる岩に坐りけり
 漣痕や波の花咲く岩の上
 青き空青き海あり初薬師
 マンションの十七階を鳥帰る
 この道は行き止りかも梅探る

鳥 雲 に

柳 澤 宗 正

(顧問)

針塚の先に筆塚梅の花
 啓蟄の雨にこもれりひもすがら
 震災に火災追ひ打ち冴返る
 早春の光あまねし尾根の道
 鴨引きて静まる小池鯉の影
 鳥雲に棺に遺句集納めらる

悼 曾根満氏



春遅遅と

松原智津子

(北海道)

白樺に樹液採る傷春寒し

雑木林雪間伝ひに栗鼠の影

あつちこち足おぼつかぬ雪解道

天気図は西高東低春遅遅と

湖一面引き鳥の群れ声交し

湯ヶ島

亀田やす子

(栃木)

侘助井上靖や靖の詩碑にブランデー

少年の生け捕る知知武木の芽時

※知知武……ハゼ科の魚

春の鳶真白き貝をポケツトに

春夕べ巻網漁の沖指して

頬寄せるネパールの人吊し雛

曲り道

沢辺たけし

(千葉)

日脚伸ぶ猿若町の小屋の跡

せせらぎや野に魁の犬ふぐり

吉原や梅かをりくる曲り道

流れ去る雲へ芽柳なびきたり

木の芽張る投込寺に髪飾り

鳥はづむ

吉中愛子

(東京)

茂吉忌の雪に一本道通す

のどけしや欠伸のやうな泥の泡

笹鳴や流れは庭を横切りて

接骨木の花や水音高鳴れり

白梅のけむる一山鳥はづむ

魚は氷に

榎本文代

(神奈川)

飛石の途切れて露の臺ひとつ
春寒しシートベルトの噛み合はず
デパ地下のにぎはひ魚は氷に上り
トーストにシナモン香る春の雪
バス停にちぐはぐの椅子山笑ふ

春シヨール

神田美穂子

(静岡)

風が好き光が好きよ春シヨール
草萌や行先決めぬ遠回り
春や春赤福餅を分け合うて
啓蟄や富士の黒ぼく鋤き返し
落ちざまに猫の飛びのく椿かな

佐保姫

井村和子

(石川)

佐保姫と風土記の丘を行き行きぬ
花見舟言問橋をくぐり行く
天界の人を恋ふる夜月朧
階上に簾干しなる寒の餅
菜の花の蝶と化したる父母の墓

大きいほう

前田貴美子

(沖縄)

切り岸の底ひ冬日のたつき道
晴晴と太平洋へ甘蔗の花
蓬餅大きいほうをいただきぬ
大胆な画布の輪郭春疾風
霞みながら烏賊墨汁の腕抱ふ

風音散歩

③〇

(五月号)

小林愛子

春シヨール小さきあくびを包みたる 中村千久

「春シヨール」は春に女性が用いる肩掛け。春のおしゃれを楽しむ喜びが色や素材に表れる。形も長方形や三角形、大判の正方形で装うのは美しさと実用を兼ね合わせ持つ。

句の「小さきあくび」が愛らしい。赤ん坊は実に表情豊かで最後に小さなあくびで回りを喜ばせる。見守る若い母、赤ん坊を優しく包んでいたのはカシミヤの春シヨールである。

木の芽張る投込寺に髪飾り 沢辺たけし

「投込寺」で、思い浮かぶのは南千住の浄閑寺である。安政2年の大地震の際に犠牲になった沢山の新吉原の遊女たちの遺体が、投げ込まれるように葬られた。新吉原開業から廃業まで380余年、遊女平均寿命22・7歳と記録にある。

作者は、墓に置かれた髪飾りを見逃さなかった。周りの樹の新芽は湧き立つよう、「木の芽張る」の力強さが救いである。

デバ地下のにぎはひ魚は氷に上り 榎本文代

「魚氷に上る」は七十二候の一つ立春三候で2月14日〜18日頃にあたる。「春になると氷が割れて魚は氷の上に躍り出

る」の意。二十四節季を三分して初候、二候、三候とした。七十二候は中国の歳時暦なので空想上の事象も多いが、掲句は現代のデバ地下の賑わいを取合わせて興味深い。

蓬餅大きいほうをいただきます 前田貴美子

「蓬餅」は葉草でもある蓬を搗きこんだ餅で草餅ともいう。餡を包んだり、黄粉をまぶすなど、気取らない餅菓子である。

草餅のよもぎが言へり老けるなど 中山純子

蓬餅をいただく元気が出るが、不老長寿?にもいいようだ。日頃慎ましかかな人も「大きいほう」を選んだのである。

白樺に樹液採る傷春寒し 松原智津子

天然の白樺の樹液は、ネットで調べたところ、早春の雪解けの頃から葉が開葉するまでの、約一か月間採取するという。「樹液採る傷」とあるのは、白樺の幹にドリルで穴をあけ、管を通して採取する姿を指す。実際、樹を疲れさせないため3年に一度の採取である。「春寒」の春に寄せる心が感じられるのは樹液の生命力のせいかも。採取された樹液はシロップ、化粧品、クラフト・ビールなどとして流通している。

頬寄せるネパールの人吊し雛 亀田やす子

雛祭の一つとして雛人形を飾るのは、子供たちや女兒の成長を願う大人たちの姿で一般的である。飾り方も、段飾りを初め大内雛、紙雛他で形は様様。近年吊し雛も人気がある。「頬寄せ」で愛撫しているネパールの人。意外性にハッとしてすぐ顔を解く。雛に寄せる感性はみな同じなのだ。

同人作品

江見悦子選



札幌 岡本 敬子

吾に遠き春風となり逝かれしか
内海良太先生 句友 和島良一さん
 雪晴れのひかり見送る別れかな
 地球儀の海を廻せば春兆す
 きさらぎと言ふくちびるのあどけなき
 すべり易き小樽の坂よ多喜二の忌

札幌 林 陽子

雪降つて降つて瓦斯灯にじむ街
 焼きたてのバゲット抱く深雪晴
 群れしまま日向日向へ浮寝鳥
 黝ぐろと貫禄増せり寒鴉
 真向ひて無口なる夫冬座敷

札幌 落合 裕子

湿原をめがけ鷺のりの急降下
 原野行く車窓に霧氷広がり
 神苑の人を恐れぬ寒雀
 白菜の甘さを愛でて一人鍋
 寒の明け師の声いつも若若し

札幌 濱谷 和代

碎氷船分つ先から潮あふる

夕日染む氷湖の果ての水平線
マフラーの二重を解く日和かな
灯明の炎の長さ寒の明け
青さ増す空の明るさ春立てり

札幌 大内 和 憲

流木の氷柱より釘宙を突く
坊守が叩き鎮る初護摩火
広ごれる土に早くも仔馬立つ
古カルテ先づ除けてより北開く
鳥入れて雪解を競ふ防雪林

札幌 紅 露 恵 子

閑さや遠山裾の寒霞
冬深む回してみする星座盤
逝かれども息づく句集寒昂
焙じ茶の茶柱と香や寒の明け
受けながす風の勢ひ雪柳

札幌 大内 マ キ 子

流水を朱に染め海の大落暉
雪解光藻の匂ひの子牛生れ
寒明けの空にのこれる月白く

春寒や幾たび返す砂時計
雪解川辞儀深深と野辺送り

札幌 中 鉢 弘 一

流水来アムール川の風連れて
組板に刃跡を残し鱈料る
鯨群来海猫待つ浜の白濁り
水草生ふ川の流れに梳かれつつ
木木芽吹く大地しづかに鼓動して

札幌 北 浦 詩 子

晴天や雪の割れ目に青光る
またひとつ愚痴をこぼせり焼鳥屋
長電話して半時や雪積る
そちこちの道に穴あり凍てゆるむ
褪せたれど微笑む雛の幼顔

札幌 谷 廣 司

待春や楢の葉擦れの音微か
子の逝けり薄明の雪美しき
啼き声の不意に哀しき春の猫
一切を吹つ切り深き雪を割る
蝦夷栗鼠の車道を越えて春林へ

江別 太田 佳美

夜通しの尺余の雪に街眠る
湧くやうに松より翔くる寒雀
春寒や納戸に探す抹茶碗
君子蘭妣の過ぎせし部屋点す
師の文に回復の文字春隣

新潟 高橋 ひろ

師の葬の朝の御明し雪明り
仏壇へ飛び込んでゐし年の豆
赤ん坊を片腕抱きに福は内
手に余る九十六粒年の豆
雪さらり夫の忌の朝よく晴れて
子育つは国育つこと梅まどか

新潟 高野 松風

手渡しの戸毎の回覧日脚のぶ
存へて吾なほ半寿深雪晴
積む雪の地の枝枝をはらひけり
似てゐると声かけらるる木の芽時
薄霞その先のみち奥会津

南魚沼 森山 暁湖

真夜中の時雨は音を消して降る
手袋を脱ぐや卒寿の節くれ手
菩提寺の炉に鉄瓶が蓋鳴す
降る雪やみしりと家の縮みたる
桜餅甘さの奥の塩加減

益子 光岡 れい子

サイレンの合図に走る野焼の火
天平の縁たどるや梅三分
笹鳴や道鏡塚に日のこぼれ
雨を得て辛夷芽吹くや登り窯
立春といふ明るさへ一万歩

芳賀 大村 かし子

寒空や店に小鳥の迷ひ込み
涌き水に青青育つ田芹かな
初午や大釜に煮るしもつかれ
機械音消えて昼餉や春田打
松の木の本明し福寿草

宇都宮 阿久津 勝利

滝音も凍りて谷の深さかな

潮入や四温日和の浜離宮
大寒や入り日に帰る群鴉
裸木に耳を当つれば水の音
竹林の青き葉擦れや梅香る

栃木 上岡 佳子

笹鳴や少し延せる試歩コース
開会の五段砧や春動く
夕日に消え夕日に生る雪螢
朝東風や新居に二台三輪車
春耕や青年の背遅しき

佐野 増田 幸子

笹鳴や老幹に日の移り来て
強霜や雨戸に指のはりつきぬ
酒樽を軒まで積んで寒明くる
二ヶ月やしきりにうづく耳の奥
梅白し空深ければ息を吐き

佐野 加藤 季代

遠き日の麦踏単語帳を手に
一筋の飛行機雲や余寒なほ
寒明けを言ひし言葉の弾みをり

山を出る水の清らや露のたう
木の芽雨昨日と違ふ山の色

佐野 阿部 澄

初雪のうつすら残る雑木山
踏めば鳴る百万本の霜柱
清流の小橋をくぐる鴨の声
春なれやうす桃色の節歌碑
春疾風孔雀は梁に羽休め

佐野 芝宮留美子

在りし日を遺影にさがす水仙花
掃き寄する落葉ゆたけし曲輪跡
うす紅のあふるる光寒桜
むきむきに映ゆる辛夷の花芽かな
城址の風まんさくの縊りほぐす

佐野 島田 和枝

よちよちの児の行く方を恵方とす
寒の月メタセコイアの尖りたる
それぞれの指定の席や日向ほこ
「福は内」子の声父に似てゐたり
足尾路の低き家並や軒氷柱

佐野 売 野 緑

東照宮の絵馬を賜る梅の花
フランスのチョコ廻り来る初句会
白鳥百羽風風ぐ沼をてんでんに
春耕や羽撃く鷺の集れる
ゆるやかに曲る麦の芽雲早し

佐野 店 網 洋 子

六分の一の白菜売られたり
大木のミモザの蒼日を返す
たちまちに立春の月隠れけり
しやぼん玉よちよちの子が手を伸し
パラグライダー近づく三龜山芽吹く

足利 大 木 茂

佐倉行きホームを迷ふ余寒かな
春寒の黄泉路の無事を祈りけり
寅さんの旅立ちの像風光る
春浅し赤さび染むる釘袋
防空壕跡は更地に笹子鳴く

土浦 澤 照 枝

だんご屋に笠間焼買ふ大石忌

境内に振舞酒や農具市
川柳根元にしぶく波高し
山裾は村人総出の野焼かな
藁の菰かぶる牡丹の芽のほどけ

加須 茂 木 弘 子

暮れ方や枝に吹かるるいかのぼり
錆色の川錆色の初氷
城跡の戦の記憶竜の玉
銀鼠に光る辛夷の蕾かな
春浅しメタセコイアの秀に鴉

さいな 山 本 右 近

菜箸にみどりのからむ春隣
流木に座す浅春の九十九里
水ぬるむ水平線を丸くして
本棚に一冊の隙春埃
咲きみちて影やはらかき花馬酔木

所沢 三 好 か ほ る

弾初のショパンのソナタなめらかに
駅頭の托鉢僧の足袋ま白
ポツペンを吹く絵図抜け道具市

宮脇綾子展

あたたかやアプリケ展の野菜の芽
雛飾る冠の緒を正しつつ

所沢 南 雲 秀 子

なで牛の鼻先光り梅真白
筆塚の裾ほつほつと福寿草
杉の花咲く溪谷の遊歩道
手土産は東秩父の寒卵
春嵐行く先見えぬ土埃

千葉 田 中 道 江

底冷えや軍隊手牒仏壇に
うすらひのうすうす寄する汀かな
とりどりの飴の嬉しや冬ぬくし
喜多院の畳の軋み呀返る
室の花畳の沈む化粧の間

千葉 松 浦 陵 保

人溢れなまり懐し新年会
良太座の数多の星や冬銀河
どつしりとお化け燈籠冬日濃し
鮮やかに着せ藁の中寒牡丹
冷込みの増す程甘し深谷葱

千葉 喜多恭仁子

「良太さーん」返事無きまま凍星に
一月寄席笑ひの後の計報かな
風花や三十年目の黙袴に
春立つや早矢仕ライスと銀ぶらと
片仮名語溢るるニユース春寒し

千葉 大 月 玲 子

春風や「良太」の名乗り耳奥に
指先に触るる確かさ名草の芽
地下鉄に風の階段余寒なほ
探梅や奥へ分け入る常の道
紅梅のあはひの空や紅ほのか

千葉 竹 澤 竹 里

パンの耳鯉の取合ふ梅日和
喜寿米寿白寿言祝ぎ梅ひらく
梅ひらく日光月光薬師仏
御詠歌の流るる御堂梅香る
梅ふふむ偕楽園は今日も晴れ

佐 倉 大 内 佐 奈 枝

大白鳥にはかに翔てり遠筑波

遺影笑む今日節分の別れかな
余寒なほ喪服を滑る清め塩
五十年住みし沼辺や蘆芽ぐむ
布靴のゆるきを履きて春の野へ

佐倉 三屋 英 俊

水垢離を着ぶくれの群れ遠巻きに
蕨蛇の遠見の枝に春を待つ
風丸くなつて探梅日和かな
せせらぎは水のうぶごゑ春隣
夜もすがら虎落笛聞く別れかな
寒明を行満願の髭の列

佐倉 横 川 良 子

梅真白門固き武家屋敷
春の闇深め城下の切通し
今更の「北越雪譜」雪しまく
小さき堰越ゆる水音春兆す
すれ違ふ匂袋や春シヨール

四街道 奥 太 雅

大納言小豆買ひ足す小正月
山茶花の花片今日は風が掃く

悼 内海良太郎
春立てば復帰と皆の願うたに
木の芽晴園児五人の縄電車
流れ来る雪雲上総に解れけり

四街道 塗 木 翠 雲

阪神忌波穏やかな須磨の海
四股踏んで海に飛び込む寒稽古
笹子鳴く古城曲輪の蔽陰に
内海良太郎主宰追悼
如月や二度とは聞けぬ良太節
打ちに打つ正月場所の触れ太鼓

船橋 山 下 良 江

枯芝を行けばさくさく音のして
冬日受け特等席のシクラメン
軒先に揺るる真白き冬のシャツ
雲低く晴れ渡りたる冬の空
冬雲の晴れゆく良太浄土かな

船橋 赤 堀 洋 子

金柑の門にあふれてピアノの音
校門の並木の裾に落の莖
春荒や校庭の土撒きあげて
たては蝶翅全開に日を受くる

談話室片寄せ雛の段飾り

船橋 久保村淑子

雲水の目玉ぎよろりと寒の街
裏庭にちちと声して三十三才
葬を終へすさまじきかな春夕焼
散り敷きて椿浄土となりにけり
坂多き街に住みをり木の芽晴

船橋 片桐帆一

春立てり曾良と旅する良太さん
寒風の鳴すガラス戸虚子旧居
風花の北国街道軒低し
白梅や荒ぶる風の懐古園
雪しろの濁りやどと千曲川

船橋 宮本加津代

花種蒔く土に笑窪をつけてより
下駄箱の上に御座する土雛
春めくやサラダ売場の新メニュー
熱湯に放つ菜花のひらきけり
逝きし夫婦つて来さう春の月

船橋 中嶋久登

良太さん柏枯葉の音が好き
袴は團十郎茶「福は内」
垂直に白鳥沼に啄める
枯芝の国分寺跡土竜道
差し潮や春満ち来る谷津干渴

柏 山本とく江

牡丹の冬芽に雨後の日ざし濃し
友偲び蜻蛉玉選る初大師
春待ちて^{良太先生逝く}春待ち切れず逝かれけり
夫見舞ふ手賀沼に春来てゐたり
渡舟着く古利根ははや梅三分

柏 内田郁代

師の逝けり実朝の忌を明日にして
二ヶ月の真青な空を瘦せ鴉
地獄門裏に盛りの寒椿
冴返る路地にヒールの音高く
哇焼は竹箒持ち始まりぬ

柏 古川京子

白鳥の横切りしあとの空の碧

千の枝の万の蠟梅日にとけさう
唇を無念に結び余寒なほ
二ヶ月の空群青に旅たてり
五羽で来て三羽の帰る恋雀

流山 穂 莉 照 子

突然の計報立春寒波来る
再会は喪服となれる余寒かな
二ヶ月や打ち合ふ絵馬の音高し
梅が香や風つつ抜けの農具小屋
そこここに羽搏くしぶき水温む

東京 名 和 政 代

節分の老いの一徹豆ひとつ
盆栽の鉢に溢るる寒の水
真向ひに飛驒の残雪輝けり
鬼やらひ摺り足で行く方相氏
立春の坪庭の苔波打てり

東京 藤 田 裕 子

旅立ちの朝バーバリの襟立てて
父に似しくつまめ吾子のご帰館か
葉牡丹の髪に光れり昨夜の雨

夜の雨に鬼打豆のほとびをり
大門は閉ざされしまま梅香る

東京 島 野 ひ さ

かたかこの咲いてこの丘日のやさし
沈丁花の香り一吹き友を待つ
窓明けて二月の満月見る今宵
野火止の流れの淵に野水仙
梅ひらく縄文人の住みしあと

東京 加 賀 葉 子

白梅の蕾ぼぼぼぼ日にふふむ
日の差して色ふくらめり冬牡丹
蕊見えぬほど渦巻けり冬牡丹
べらぼう風かかへ広場へくりだせり
日の丸を春風なづる皇居かな

東京 久 留 島 規 子

福詣あんかけうどん食べて締め
豆打てば口衝いて出る良太の句

追悼 良太先生句

寒昂ぢやあお先にと逝かれけり
誰も見ぬ庭を灯して藪椿
霜柱踏んで近道まはり道

東京 下 嶽 孝 一

吊られたる猪の眼に野の光
古椅子の甘きねぢ締め年新た
路地奥の門に日の丸淑氣満つ
乳呑み児の挑む寝がへり春隣
木木の色映せる池の春めけり

東京 草間三香子

お薬師の池を越えたり追雛豆
水口の鯉の口あく春日差
ひび深き桜古木のひこばゆる
寒鴉一羽の鳶を追ひに追ふ
日溜りにかたまる鴨の羽繕ひ

東京 岡村純子

空つばの菓子袋突く寒鴉
友逝きて庭の広さや寒雀
残る鴨水際に群れて揺れてをり
大樟の空を支へて芽吹きをり
母逝きて文読み返す朧の夜

東京 桑原優美子

如月や黄色まばゆき滑り台

後ろ手にバレンタインの日の小箱
枝先の空へ空へと春近し
空つばの公園に揺れ半仙戯
美容師の鋏の音や春立つ日

東京 三村紀子

晴れ晴れと新横綱の福は内
桃色の袴並ぶ追雛式
朧夜やふと喋りだすぬいぐるみ
四方に振る打出の小槌梅の花
白梅や日影がちなる女坂

東京 小池清晴

竹藪にただ一輪の野水仙
枯櫟公園の空鷲掴み
寒き朝両手で包むマグカップ
芹鍋の香り漂ふ二階まで
千波湖を見下ろす崖に寒紅梅

東京 一由久美子

待春やぐるりと鯉のひるがへる
紋章のはづむ馬衣花ミモザ
下萌や馬の歩幅の石の階

春シヨール骨太の母小さくなり
鳥帰る岬に小さき潮仏

武蔵野

砂地 宏子

春近し坐る人なき椅子一つ
一枚を剥がせば春へカレンダー
草萌やいま石舞台がらんだう
ものの芽のひそとふくらむ朝まだき
如月の月ゆつくりと西行忌

町田 広瀬 俊雄

阿夫利嶺の肩に沈めり冬落暉
風強し水面にさやぐ糸柳
土割りて今年も出づる風信子
古墳への入口ぬくし犬ふぐり
欣一の墓へとつづく水仙花

町田 桔梗 純

新暦絶筆として逝かれけり
明け方の雲鴉色に余寒なほ
一人旅白子どんぶり家苞に
梅の道五千歩越えて休み茶屋
語らひのつきぬ再会涅槃西風

日野 喜多尾 明子

雪くるか窓に見送る夫の背
料峭の瓶回収の音空へ
春寒し二番線行きエレベーター
梅咲いて八十路の学の成り難し
梅東風に乗せ投げられよ良太の句

立川 正田 華子

牙返る良太の葉書大切に
浅き春稻荷の幡の鳴りやまず
建国の日分水大き泡を吹く
円墳の標のごとく犬ふぐり
たんぽぽのまだ幼くて崖の径

横浜 西本 才子

登り来て富士へ傾く花葉畑
野川べり小草閉ぢこめ薄氷
冬青空鋭き声上げて鳥過る
レジの前魚屋海胆を並べをり
銀杏落葉とばして海の風荒し

横浜 大橋 雅子

うぐひすの笛に始まる梅まつり

緋毛氎華ぐ野点梅の寺
おちよば口のやうな芽を出しチューリップ
山茶莢の花泉水に映ゆる寺
春浅し俳味ある句に師を偲び

横浜 山崎 郁子

黄ばみゆく庭の蜜柑の美しき
冬晴の庭に師の句を読みゐたり
寒鰯の豊漁という能登の海
竹やぶに笹鳴を聞く真昼かな
極寒の夜道を帰る苦学生

横浜 田賀 煤恵

喪の家の桜冬芽のふくらみぬ
花柄のブラウス揃へ春を待つ
早春の雲やはらかに千切れゆく
白梅や暮れ際の庭明くて
枝先に粒光らせて春の雨

横浜 三木 豊子

薄氷のかけらに透かす青き空
雪下しどさつと落す軒端かな
夫の忌の寒夕焼を拝みけり

星冴ゆる三毛猫ひとと屋根伝ひ
寒蜺木桶に舌を開きけり

横浜 星野 信子

熟成を待つ樽ワイン山眠る
寒夕焼雲一片も動かざり
小正月庭に雉鳩来て鳴きぬ
日の当る立春の野やみどりぼつ
白梅の咲きて此の世を朗かに

川崎 新妻 奎子

春隣麒麟の睫毛濡す雨
大声に呼ばれて梅の下潜る
手の届く薄氷のみな割られをり
濯ぎ物干し終りたり名草の芽
師の逝ける浅草の空春の色

川崎 大久保 進

一病を命の糧に冬菫
獅子舞の脚を休めて逝かれけり
ギッタンのままのシーソー冬深む
春立つや一葉に解くる水の張り
踏み外す夢の階段春の闇

肉球の匂ひほのかに春の土

鎌倉 恒川 清爾

鬼は外曇る玻璃戸を少し開け
料峭や恩師の獅子の脚止る
のどけしや日なが漫画と珈琲と
故郷や砂の混りし蜆汁
かげろふや父の遺影のセピア色

伊勢原 佐藤 和子

ともづなに若布からまる船溜り
まんさくや大山朝の日を返す
かまくらの中に眠たい子がひとり
きさらぎの田に散らばつて雀どち
蜷の群れ水てらてらとその上を

静岡 大村 峰子

ポストまで顔埋めたる春シヨール
湖も山も煙りて春立ちぬ
猟犬を呼ぶ指笛の河原より
修繕の済みし吊橋村おぼろ
余寒なほ喉飴句座を廻りをり

静岡 宮崎知恵美

ポケットに神酒を仕舞うて山始
虎落笛待合に鳴る診療所
羚羊と出合ひ頭を動かざる
七種粥刻む葉の香の強きかな
凍りたるTシャツ板のごと揺るる

静岡 望月 敏男

登呂村の薄日を突く寒雀
平らかに登呂田へ向ふ冬の水
喧嘩独楽一人泣せて終りけり
水鳥の水を掴んで着水す
社殿なき神の窟に冬蒲公英

静岡 藤原千代子

瀬の音に降り立つ二羽や草萌ゆる
寒晴や麴袋の百を干す
鳥雲に句会の席の空きしまま
胸に置く綾子の句集春の星
一匹を光ごと呑み春の鳥

静岡 荻野加壽子

金縷梅の花ちりちりと放電す

日脚伸ぶ釦取り置く母の服
消えやすき言葉の記憶星朧
春寒や腸一つ無き重さ
二ヶ月や阿修羅の如きナースの腕
失ひしまま風色の春帽子

静岡 小川 明 美

左義長へ登呂田の畦を小走りに
どんどの火燃えつくるまで離れざる
鍬始土の乾きへ鴉鳴く
三角の波の天辺ゆりかもめ
次郎長の人形に辞儀春シヨール

静岡 藤本 節 子

初点前少女の指の美しき
輝きを放つや寸の霜柱
日溜りは猫の溜り場梅三分
春怒濤テトラポッドをひと呑みに
手に取りて楔確む農具市

静岡 大長 文 昭

野水仙幅三尺の蟹の道
大富士の真下に鳩の頭出づ

老松や防潮堤へからつ風
日矢まぶし沖に二隻の白子船
鉄橋の下より大河涸れ始む

静岡 加山 ひ さ 子

逝く叔母の枕辺に置く小豆粥
春光や羊羹を切る木綿糸
受け皿に溢るる酒や春来る
一輪の梅匂ひたる夜更けかな
年の数など食べられぬ鬼は外

静岡 石川 裕 子

柗挿すがたつく引戸納めつつ
伸びやかに夫のテノール福は内
尖りたる紫陽花の芽の胭脂色
雲梯を渡り切る子や山笑ふ
鍊東風糶場にでんと台秤

静岡 本多 ひと み

スキップに裾翻る春コート
緩やかに木肌を伝ふ春の雨
人影の無き蟹の路地草萌ゆる
信楽の狸を囲む黄水仙

白梅や枝を飛び交ふ鳥の二羽

静岡 杉 澤

修

夕笹子茶の一叢の背丈越ゆ
春の譜や瀬音に混る鳥の声
如月のひかり射し込む座禅堂
木の芽冷え墓石を刻む鑿の音
春めくや土ほくほくと土竜塚

射水 成瀬 真紀子

訃報欄に病名を知る寒さかな
皮手袋組んで十指を収めけり
あふらるる裏地の緋色春一番
朽色の大地ふんまへ落のたう
車椅子収まる机ヒヤシンス

金沢 中 條 睦子

三分の一の胃袋雑煮食ふ
良太師逝く星の瞬く冬空へ
ふるさとの磯の香つれて新若布
花形の切り貼り障子年明くる
焼け跡は真平らなり冬夕焼

金沢 今越 みち子

節分会枀に大豆のピラミッド
ねこやなぎ茶舗の出窓に利休像
百本の糸めく松の雪解水
「ほうきれい」庭へ良太や春の夢
白雲に春の青空見え隠れ

金沢 伊藤 美音子

船出待つふつと匂へる皮ジャンパー
鰯汁の目玉旨しと翁いふ
舟小屋の庇ほまちの干鰯
山茶花の日を頒ちあふ赤と白
井戸掘りの櫓据ゑたり日脚伸ぶ

金沢 高田 たみ子

寂聴の本読み返す冬ごもり
恙く暮るる一日やおでん鍋
凍返る解体待ちの旧校舎
すれ違ふ人に目礼深雪晴
ゆつたりとベンチの二人暖かし

金沢 豊田 高子

水面鏡朝の日の筋風の筋

獵小屋に血糊黝ぐる獵期果つ
しなやかに日差し跳ねゐる猫柳
木曾馬の黒眼まろまろ木の根明く
古書店へ風の街ゆく春シヨール

金沢 松井佐枝子

頬紅ほど雪嶺染むる落暉かな
臘梅の香に誘はれ逝かれしか
天窓のひかりを散し雁帰る
弛みなく用水ながれ菖蒲の芽
豆腐屋の喇叭ひびかせ春一番

金沢 石川純子

図書館の静寂破る咳ひとつ
虹色の長短競ふ軒つらら
舞楽面の眼窩の暗し冴返る
早春の猫の一瞥裏通り
流し目の夢二美人画春の月

金沢 河野尚子

初山河能登の復興なほ半ば
自在鉤上げて薪足す五箇の冬
天神の伐られし櫟新芽噴く

降る雪の最中に届く師の訃報
古稀越ゆる剣士はつらつ涅槃西風

金沢 道場啓子

早春や地震跡の能登あとにして
積ん読の増ゆるばかりよ春隣
約束の電器屋来る雪の中
たまさかに開くレストラン日脚伸ぶ
夕さりの今し上り来春の月

金沢 杉本年虹

妣編みしセーター虫に食はれけり
砂利を踏む赤子の靴や冬すみれ
なつかしき置き葉屋の紙風船
日当りに蠟梅ふふむ鄙の家
京都より菓子の小包けふ雨水

金沢 南恵子

凍星や千年前の光かも
図書館の返却ポスト日脚伸ぶ
湯治場の振子時計の春を待つ
野へひびく杭打つ音や春きざす
遅き日や量られてゐる佐久の鯉

金沢 松下 信子

枯木星幾光年の瞬きを
大寒の青空分ち飛行機雲
牡丹雪雜踏に友見失ふ
蔵壁の剝落著し藪椿
薄れ日に遠眼差しの古雛

金沢 北川 禮子

鉄舟の墨迸る襖の書

左義長の人の行き交ふ綾子句碑
初場所の上ぐる軍配輪島塗
奉納の芸妓の舞や節分会
耳遠き夫と向合ふ春炬燵

金沢 清水 英理子

社までゆるき参道忘れ雪
愛犬の弾む歩みやクロッカス
梅二月古地図に探る寺院群
揺れながらさみどり散す柳の芽
泣き笑ふ赤子真中の雛祭
白山 加藤 美栄子
追悼の鐘の訝や山眠る

椿くべて逝きし子のこと触れもせず
酷寒や父を重ぬる抑留記
御積りのつもりが所望爛の酒
百年の宿継ぎ分葱ぬた和へに

内灘 塩井 志津

着ぶくれて微熱のひと日やり過す
雪雲に白山消ゆる計報かな
亡き友の終の一句や月冴ゆる
松風や菰巻しかと供養塔
初場所や初めて結へる大銀杏

七尾 谷 渡末 枝

地吹雪や海へ傾く塩煮小屋
雪女星降る夜の影まとひ
間伐や雪どけ著きけものみち
水鏡余白に睦むかいつぶり
引率の教師を囲む受験生

敦賀 倉谷 ます美

代参の祖母は北野の初天神
初御空新妻つれてめでたけれ
初開茜の中の良太の句

雪しまく式部ゆかりの越へ来て
女正月顎懷へしまふ夫

敦賀 鶴田 勝子

一杓の若水しむる六腑かな
ふりだしに戻る子ふくれ絵双六
雪しまく帰らぬ友の家の闇
寒土用天神さんの夜泣石
悴める手に数珠さぐる友の葬

敦賀 中川 雅月

書生等の福茶いたたく喉仏
迷走のホワイトアウト雪しまき
長生きを誓ひ八十路の三日かな
百歳の手のしなやかや初詣
嬰兒の頭擡げて初笑

敦賀 中村 優

稚の髪やはらかく立ち梅ふふむ
恐竜のフィギュア並べて草青む
悴める手にはらわたを割く小出刃
ふりだしへ双六廻り泣きだす子
寒稽古訓示唱ふる豆剣士

漱石忌旅の鞆に単行本
千代の春城址に残る薬医門
寒林へ夕陽の醸す影絵かな
遠く来し足利学校梅一輪
深深と更くる寒夜のラジオかな

徳島 福島 吉美

浮玉の朱色に群るる冬鷗
棟上げの槌音響く松の内
蠟梅の香り漂ふ木偶屋敷
露座仏の膝に弾めり玉霰
読初はマザーテレサの伝記本

徳島 村上 和義

車椅子窓辺に寄せて毛糸編む
焼け跡に新しき庭梅ふふむ
透き通る潮の旨みの若布汁
一枚の空を濁して黄沙来る
留守電に合格通知山笑ふ

徳島 宮西 修一

海岸の芥の中を寒鴉

葉牡丹の渦巻く駅のロータリー
路地裏を行く猫の声春隣
春浅し猫の擦り寄るパンタロン
立春大吉卯の黄身の盛り上る

徳島 平岡

功

きらきらと飛ぶ賽銭や初戎
風と火の神神猛る大どんど
「巳」の文字の高く燃え飛ぶ吉書揚
潮風や砲台跡の野水仙
橋多き街に一樹の寒桜

石井 木内 マヤ

老犬に毛布かけやる白き朝
雪降らす雲引き連れてトラクター
風花や落下地点の定らず
春天へ飴売りの声羅漢寺
羅漢寺の水琴窟は春の音
鰯の仔の落葉啜へて遊びをり
単線の鉄路延びゆく枯野かな
笹鳴へ寄ればたちまち風の音

小松島 岡田 あゆみ

浮寝鳥寝返りのごと向き変ふる
水琴窟の音まだ堅き春隣

長崎 丸本 祥夫

ひび割れにセメント足せり年つまる
落葉掃く止まぬ落葉を浴びながら
おが屑を崩す懐手の毛蟹
楮蒸す小屋に甘き香充滿す
軍鶏小屋のトタンに鳴れり冬柏

西海 山下 敦子

竹林のきゆうきゆう鳴れり大寒波
潮風を総身にうけ藪椿
のたりともせずびちやぶちやと春の磯
朝東風やさざなみ模様橋脚に
水底に長き吾が影彼岸潮

宮崎 中山 宣

古民家にばけつの水や露のたう
日溜りに背のぬくもり春立ちぬ
一陣の風に舞ひ散る春落葉
取水口活気づきたる春田かな
土手に来て出合ひ頭や蛇出づる

宮崎 中山 芳 教

麦踏は夢まぼろしに里の畑
梅の香やもの皆憩ふ星あかり
日だまりに猫の居場所や春淡き
見詰子牛の囁き二句め合ふ子牛の瞳春の雲
春の糶子牛に贈る頸飾り

宮崎 鳥 居 達 史

納骨日遠く尾鈴山おすずの霞みたる
句友ゐて句敵がゐて春来る
断捨離にばね指跳ぬる余寒かな
誤作動の火災報知機凍返る
逃げ道は鬼門のすきま鬼やらひ

那 副 中 本 清

炉の灰の均せば句うがんと御願ごがん解とき
階の雨の重み※御願解き……山崎十二月二十四日に火の神に感謝し御願を解く行事や寒の明け
縄文の男となりて浅蜷割る
勝鶏を磨きあげたる水の綺羅
城郭の昼を深めて島桜
海光へ風の甘さや甘蔗きびの花

西 原 宮 城 勉

烈風のたてがみ見えて寒の海
珊瑚石の囲ふ磯畑冬菜摘む
冬木に癖わが影に癖あるがまま
天国内海名主幸 追悼は花の郷ぞや良太さん
製糖期村の百戸の日影濃し

豊見城 渡 真 利 真 澄

強東風や振り分け髪の根のあらは
牛小屋の轍の跡に茅花かな
牛小屋の梁に通へりつばくらめ
結界のやうな倒木寒戻る
草萌の遠く近くに亀甲墓

ペリシ 鈴 木 波 江

春月や歩くと決めて回り道
大叔母の手縫羽織に春装ふ
街騒に耳立て花舗のシクラメン
桃色か碧か鏡に春シヨール
宛てもなく街をぶらつき春かなし

同人作品の佳句

江見悦子選

地球儀の海を廻せば春兆す
 仏壇へ飛び込んでゐし年の豆
 せせらぎは水のうぶごろ春隣
 再会は喪服となれる余寒かな
 古椅子の甘きねぢ締め年新た
 雪くるか窓に見送る夫の背
 踏み外す夢の階段春の闇
 金縷梅の花ちりちりと放電す
 地吹雪や海へ傾く塩煮小屋
 一枚の空を濁して黄沙来る
 笹鳴へ寄ればたちまち風の音
 軍鶏小屋のトタンに鳴れり冬柏
 逃げ道は鬼門のすきま鬼やらひ
 海光へ風の甘さや甘蔗の花
 製糖期村の百戸の日影濃し

岡本敬子
 高橋ひろ
 三屋英俊
 穂苅照子
 下嶽孝一
 喜多尾明子
 大久保進
 荻野加壽子
 谷渡末枝
 村上和義
 岡田あゆみ
 丸本祥夫
 鳥居達史
 中本清
 宮城勉

同人会だより

小さな吟行句会

櫻本文代

神奈川県支部では、春に主宰を迎えて吟行句会が行われた。以前は吟行地もいろいろで毎年続けていた。今回は平成30年春、横浜で開催した第11回神奈川県支部鍛錬吟行句会以来、7年ぶり、漸くという思いが深い。

空白期間が長かった一番の要因は新型コロナウィルスの蔓延である。そして会員の高齢化により句会の人数も減っている中で、活動できる体制づくりが難しくなってきたことも大きかった。

今回の吟行句会にあたって、確認のために同人名簿の句会一覧を開いてみると、会場が吟行地とある吟行句会に目が止まった。毎月、隔月、随時とそれぞれ違いはあるが、なぜか活気が伝わってくるような気がした。

それなら横浜から二人でも三人でもいい、小さな吟行句会を始めたい。一人なら通り過ぎてしまう道も、二人なら脇道に入ってゆける。思いがけない出会いに恵まれるかもしれない。公園や木蔭にベンチを見つけたら句会ができる。喫茶店の隅で珈琲を飲みながらのくつろいだ句会もいい。

決め事はしないで、穏やかな日に声を掛けて道連れができたなら、身近な所からのんびりと歩いてみようと思っている。

3月の「万象」オンライン同人句会高地点

- | | | | | | |
|----------------|----------------|---------------|--------------|--------------|-----------------|
| 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 14 |
| 馬鈴薯植う日時計となる山の影 | 風が好き光が好きよ春シヨール | 静けさの重なつてゆく春の雪 | 鳥雲に過客に紛れ師は旅に | 瞳澄む仔馬や丸き空ふたつ | ところと記憶のかけら春の風邪 |
| 下嶽 孝一 (東京) | 神田美穂子 (富士) | 桑原優美子 (東京) | 三屋 英俊 (佐倉) | 三屋 英俊 (佐倉) | 成瀬真紀子 (射水) |
| 鈴木 波江 (ベルリン) | 山下 敦子 (西海) | 桑原優美子 (東京) | 大木 茂 (足利) | 山本 右近 (さいたま) | 参道に根巻き転がし苗木市 |
| 桑原優美子 (東京) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 肌色に卵の殻の透きて春 |
| 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 眉ふとく引く如月の女かな |
| 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 牛の子のよろよろ立てり路の盡 |
| 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 夜の底のしづけさ春の雪降り積む |
| 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 海胆を割く老女二人の浜訛 |
| 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 分け合ひし綾子の里の路の盡 |
| 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | ゆつたりと影曳く鯉や猫柳 |
| 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 菜の花の土手や磐井の乱はるか |
| 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 空つばの菓子袋突く寒鴉 |
| 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | 中鉢 弘一 (札幌) | おかつばの前髪揃へ雛の日 |
| 恒川 清爾 (鎌倉) | 恒川 清爾 (鎌倉) | 恒川 清爾 (鎌倉) | 恒川 清爾 (鎌倉) | 恒川 清爾 (鎌倉) | 恒川 清爾 (鎌倉) |

(※句頭の数字は点数を示しています)

「中山純子記念俳句賞」速報

第7回中山純子記念俳句賞は次の通り決定しました。

正賞「白山に雪」伊藤美音子（金沢）

〃「極月の水」神田美穂子（静岡）

準賞「白川郷」成瀬真紀子（射水）

佳作「おぼここの花」下嶽孝一（東京）

特別賞「初午」今越みち子（金沢）

詳細については6月号に掲載します。

万象俳句会

〈新会員のご紹介〉

3月の新規同人（再加入）です。

海野みち子様 静岡市

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2025年 5月号

特集

おらが里の季語
〜郷土を詠む〜

郷土の季語を詠んだ俳句とエッセイ！

北海道…尾村勝彦 山形…鈴木正子
茨城…大竹多可志 石川…中西石松
三重…谷口智行 高知…亀井雄子
福岡…千々和恵美子

グラビア 俳句界NOW 大橋一弘

特集

初学のころ

私の俳句の出発点

○私の初学のころ〜エッセイと俳句3句

池田澄子 今井聖 四ッ谷 龍
成田一子 中本真人 神野紗希

○俳句を始めたと思う人たちへ
〜俳句実践のススメ 久保純夫

○「初学」のその先へ 樫未知子

発表
第17回文学の森賞
第26回山本健吉評論賞

【注目の句集】松林朝蒼『水声山色』

連載 宮坂静生 青木亮人 栗林 浩 坂口昌弘 ほか

「俳句界」投稿欄 一流選者11名！
充実の投稿欄



株式会社 文学の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞(三月号)

松原智津子

北へ来し沈丁に菰厚く巻く 谷 廣司

「沈丁」は香氣が強く、沈香・丁子に似るため名が付いた中国原産の「沈丁花」の略。庭木などとして珍重されるが、北海道には定着していない春の季語。その貴重な香りの珍しい花が「北へ来し」為に特別手厚く菰を巻いたという心情の一句。季重なりながら、その優しさに共感。

円やかな日差しを背に冬葉摘む 光岡れい子

日向ぼっこをしたいくらいの日差しを背に冬葉を摘む生活。羨ましい！でも、上五が何とかならないかしら？「円やかな日差し」は実感がわかないの……。『おだやかな』『やわらかき』など、言葉探しをしてみても！

太陽に重さありけり十二月 大月 玲子

「太陽」の実態は科学の範疇でも解明は不可能。然し俳句でその実態に迫る可能性に挑戦を試みたのがこの一句。

極月と言われる十二月。切羽詰まったイメージと共に、一年の重みがズバリ太陽の重さとなって作者の身に迫って来た。心象写生とでも名付けたい新しい句風。

ていねいに夕日をしまふ冬の海 山本右近

「ていねい」「しまふ」を平仮名で表現している作者の意図が親身に伝わってくる一句。丁寧に仕舞われるものが「夕日」である意外性。しかも普通は、荒れ狂う冷たい筈の冬の海が想像されるが、この海は柔らかい。暮れゆく冬の慕情に共感。

ジェノサイド繰り返す愚や冬ざる 横川 良子

「集団殺戮」の一句。詩情を廃し、愚を嘆く。

辛うじて「冬ざる」の季語に救われた感が否めないが、詠まざるを得ない現代社会の実情は無視できず複雑な心境。

沢木先生の標榜した社会性俳句の意義が偲ばれる。

片減りの靴や勤労感謝の日 中嶋久登

勤労感謝の日は、「勤労を尊び生産を祝い国民がお互いに感謝し合う」趣旨で、昭和23年に制定されたが、当時とは勤労の意識、実情の変化が著しく、本来の気風が失われたとも思われる昨今、昭和の勤勉な国民性を素直に表現。一読納得。

風をため日のため落葉溜りかな 穂苅 照子

毎年秋には黄色い絨毯を敷き詰めたような銀杏落の道を歩くのを楽しみにしている。この「落葉溜り」が銀杏とは限らない。寧ろ雑木林の様な色、形の落葉に風がこもり、薄日がとどまり、秋ならではの風情であったと思われる。

作者の豊かな詩情が躊躇いなく表現された好ましい一句。

着ぶくれて座席の巾を確かむる 島野 ひさ

この座席は地下鉄かしら？ 慎重深い作者は着膨れた身で躊躇している。状況判断は俳句にとつても必要だけれど、

〈着ぶくれて恐ろしきものなくなりつ 原田 喬〉の精神でいいと思います。お互い様ですもの。

我が影の碎けし音や枯葉踏む 岡村 純子

落葉でなく枯葉を踏んだ音感を見事に捉えた。

暫く雨が降らず乾ききった落葉道を、我が影を追いながら行く無心な作者。踏みしめる枯葉の音に瞬間「影が碎ける」と発想が閃いた連想の一句。俳句って面白い。

オスプレイ冬青空を掻き回す 佐藤 和子

故障したり、墜落したり、事故、不備、何かと問題が多く世間を騒がせている「オスプレイ」。冬晴れの青空までも掻き回していると言う作者の批判精神が窺える。一見単純な写生句だが、深読みもできて興味深い。

大仏の螺旋髪に踊る初霞 為永香月枝

野天の大仏でなくてはならない。螺旋髪は仏像の頭の右巻き、巻貝の様な渦状の髪型。その螺旋髪に初霞が躍る様に散っているとの句意。敦賀に住む作者が見慣れた大仏なのか他所の大仏なのかはわからないが、「初霞」が自分にも散りかか

ったであろう。読み手にも季節感が伝わって来た。

梵鐘に身を撓はせて煤払 村上 和義

「身を撓はせて」梵鐘を撞くなら当たり前。何と煤払いをしたのである。「煤払」の季語に、「煤竹」「煤籠」「煤逃」「煤湯」など面白い関連季語のあることを知った。新年を迎える為に塵や埃を掃き、清めてきた日本人。きっと良い鐘の音が響いたことでしょう。

毛糸編む一目一目のときざみ 宮田 千恵子

自分の為？ 誰かの為？ 何を編んでいるのか一切不明。只ひたすらに一目一目を編む、まるで時を刻む様に。

それでいて「時」を忘れている作者。編物に没頭する様が自然体で詠まれていて、昔の私を思い出すことができた。

万象基金のご報告

匿名 五口
倉谷紫龍様（福井） 一五口

（令和7年2月9日～4月8日・受付順）
「万象」の発展のため、大切に使用させて頂きます。

万象俳句会

神楽坂

名和政代

毘沙門天のぼる春着の裾模様

その昔、神楽坂の周辺は隆盛を誇った花街だったが、今は洒落たレストランなどが立ち並んで賑わいを見せる。坂を登ると左手にあるのが「毘沙門天」を祀る善国寺。掲句は初詣の様子を詠んでいる。着飾った娘さんの「春着の裾模様」の華やかさが、この街の来し方も思い起こさせてくれる。

日を跳ぬる仕事始の測量棒

正月の松が明けて世間がそれぞれに動き出す。作者はそうした「仕事始」に、地面の距離や勾配を計測する測量士の作業を目にしたのだ。地面に立てた赤白に塗り分けた「測量棒」を目安にして、レーザースキナーで計測する風景。上五の「日を跳ぬる」が新春の明るさを醸し出している。

女正月祝い取り出す黄楊の櫛

暮れから正月にかけて忙しかった女たちが、改めて新年を祝うのが「女正月」。そんな日のお洒落にと手にした「黄楊の櫛」を、晴と曇の狭間にあるモノとして見せている。(女正月山かけ井でお開きに 良太) こんな句も思い浮かんだ。

着ぶくれて歩行者天国神楽坂

毘沙門天への参詣客などで混雑する片側一車線ずつの坂道は、新年ともなると、歩道をはみ出した人たちが混雑するのだろう。しかも、寒風の中を行く人が「着ぶくれて」となればなおさらのこと。作者もその雑踏の中の一人である。

渡良瀬遊水地

茂木弘子

遊水地 抜くる一水菱紅葉

渡良瀬川の氾濫に備えて設けられたのが渡良瀬遊水地で、関東地方四県に跨る国内最大規模のものという。掲句は、ここから流れ出る小流れでの囁みである。秋も終わりを迎えるころ、水面を覆っている菱が赤く染まっている。作者の背後には、枯野となり始めた広大な遊水地が広がっているのだ。

真つ白な毒茸照りぬ役場跡

平成の大合併があつたりして、昔の役場があつた辺りは建物も取り壊されていたのだろう。作者がそこで目にしたのは「毒茸」だった。如何にも毒毒しい紅色をしたものではなく、それは晩秋の日差しの中で白く輝いていたという。調べると猛毒の白い茸があるようだが、この「真つ白」が曲者である。

ボードセーリング北風に荒れたる湖に

掲句の舞台は広い遊水地の西南、谷中村を水没させて造成されたハート形の谷中遊水池。空つ風で有名な土地柄である。「北風」の吹く中で激しく波立つ湖面の様子に驚いた作者は、字余り覚悟でこの情景を詠み留めようとしたのだ。

春を待つ沼辺を漁るこぶのとり

ラムサール条約自然湿地として登録された遊水地は、コウノトリの飛来地でもあるという。冬の終わるころ、まだ暗い水辺にも生き物が蠢き始める気配があるのだろう。それを目ざとく見つけた鳥の姿を詠んだ一句。春は近い。

私のこの一句

詩を書いて青年はしろつめ草に 前田貴美子

水辺の公園。ある春の一日。青年は句友達と離れてひとり句帳を広げていた。花や鳥、湯風や雲、様々な出会いの中、長くベンチを離れない。ただただ時の流れの中にいる。言葉を探し続ける彼は、そのまましろつめ草の野に沈み、しろつめ草になってしまふかのようだった。

対象と対峙し生まれる言葉は、詠み手の心の写生の言葉でもある。眼前の映像が、今の私のすべてを包む。懐の深い、写生俳句を目指していきたい。

青年は書き止めた言葉達と、春の野に遊ぶ。

秋の夜の洗ひ重ねし皿の音 榎本文代

いつもは一人の食卓も、家族が集ってくれとにぎやかで楽しくなる。そのぶん珈琲タイムを終えて帰った後には、しばらく寂しさが残る。後片付けの洗い物を始めると、一枚一枚伏せてゆく皿の音とともに、日常の時間に戻ってゆく思い

がして句になった。しみじみとした秋の夜であった。

内海名譽主宰からは「日常水辺のいつも経験する事柄。あらためて俳句の調べに乗せると新鮮に感じる。殊に『洗ひ重ねし』の言葉に実感がある。」と選評をいただいた。

落葉松の金の針降る秋日の中 松原智津子

平成18年、角川書房から出版した第一句集のタイトル句。同年10月1日（日）は朝から電話が鳴りっぱなし。

朝日新聞の朝刊、大岡信さんのコラム「折々のうた」に掲載されていると云う。当時は苫小牧市に住んでいて、支笏湖に行く国道の落葉松林を詠んだ一句。

大岡さんは「北海道の雄大で、しかも繊細な自然界を詠むのは、俳人にとっては大きな挑戦だろう」との評。

北海道に骨を埋めるつもりになっている。



新同人競詠作品評

江見悦子

雪

札幌 谷 廣 司

北海道サロベツ原野で少年時代を送った谷さんは「俳句が大好き」と言う。昨年退職後は、豊かな時間を謳歌しサイクリング、スキー、ピアノ等を楽しみ、俳句にかけると時間も増えた。

ななかまど一房つつに雪冠り

主居らぬ古き牛舎や雪しまく

晴れ切つてサロベツの野の雪青し

一句目、ななかまどの真つ赤な実が目立つようになる北海道の秋。雪をかぶると白と赤の対比が鮮やかだ。その光景を「二房つつに」と切り取った。焦点の定まった、瑞瑞しい句。二句目、「主居らぬ」の主は乳牛だろう。今はもう使われなくなった牛舎なのか、かつては酪農家と牛との交歓があり活気に満ちていたが今は雪が激しく渦巻き、小屋にうちつけるばかりだ。役目を終えた牛舎に寄せる哀惜の情が深い。

三句目、「サロベツの野」とは北海道の北端に近く、海岸線沿いに広がる広大な湿原。ラムサール条約にも登録されている。その原野に降り積った雪の青さを詠んだ。「晴れ切つて」と大きく詠い出し、「サロベツの野の雪青し」と一息で続けた。晴れの極まった青空の下、サロベツ原野の雪への讃歌である。

これからも気宇壮大に北海道の自然と向き合つて下さい。

笹 鳴

東京 一由久美子

幼い頃から、「ホトトギス」の同人だったお母様の影響で俳句に親しんでいた久美子さん、「感動を俳句にする難しさ」に苦しみながら、好奇心と積極性で俳句の世界を広げている。

真言にひらがなのルビ息白し

鐘樓の急な石段日短か

緑青の邪鬼を見てある寒さかな

一句目、「真言」とは古代インドのサンスクリット語のマントラの訳語で、梵字のこと。「真実の言葉、秘密の言葉」を意味する。般若心経の最後の「ギャーテイ、ギャーテイ」の梵字にルビが振られているのを見かけたりする。作者は読経に加わっているのか、梵字のひらがなのルビに目を凝らしている。季語「息白し」から、作者の懸命さを感じる。季語の生きた句となった。

二句目、鐘樓に続く「急な石段」を、鐘を撞くために今までも何人の修行僧が急いだことだろう、などと思いながら上っている作者。短日だからこそその思いである。「日短か」で決まった。

三句目、「邪鬼」とは仏教の世界に登場する鬼のこと。興福寺南円堂の四天王像に踏まれている邪鬼を思い浮かべた。「緑青の邪鬼」に、永遠に踏まれ続けている邪鬼の姿に「寒さ」を感じている作者。季語「寒さ」には、皮膚感覚の寒さの他、心理的な心細さ、さびしさなどの心象的な意味合いもある。

これからも季語の世界を深め、自分の俳句を楽しんで下さい。

命のバトン

敦賀 為永香月枝

歴史や文化の薫り豊かな敦賀の地で過ごし、現在はご家族に囲まれて俳句を楽しんでいる爲永さん、「命のバトン」の題名に興味をひかれた。

群青の湖に崩るる冬紅葉

去年今年會孫に繋ぐ命かな

人日や夫は教師の顔となり

一句目、作者はよく若狭湾の三方五湖方面へ吟行に出掛けると聞く。この句、「崩るる」と表現したところが作者の発見。冬になってもまだ燃えるように赤い冬紅葉がどっと散り始めた瞬間、その最後の激しさを「崩るる」と詠んだ。群青と赤の色彩も印象的だ。

二句目、季語「去年今年」は、去年から今年へ時が速やかに移ることをいう。掲句は時の流れを、脈脈と繋がる人間の命に感じている。世代交代を繰り返して自身の命があり、その命が新しい曾孫の世代へと繋がって行く。まさに「命のバトン」と言えるのだろう。主体的に「繋ぐ」と力強く詠んだ。

三句目、「人日」が新年の季語。中国の前漢時代に定められた日で、元日から六日までその年の禽獣や農作物が豊かかどうかを占い、七日は人を占ったことによる。この句、松が外される人日となって夫の顔が教師の顔に戻ったという俳味のある句。「教師の顔」とはどんな顔なのか、想像してみるのも楽しい。

これからお仲間と一緒に風土色豊かな句を詠んで下さい。

春の水

横浜 星野信子

入会から日が浅いが、小林愛子名譽顧問の教えの許、「日々の生活の中で見つけたこと、感じたことを、自分の言葉で表現したい」と語る信子さん、「句会の熱気が好き」と言う。

石仏の罅に染み入る春の水

モネの絵のひかりに触るる初秋かな

水槽の亀洗ひをり今日白露

一句目、長い間地に据えられていた石の仏に罅が入り、春の水が染み入っていると感じた作者。石仏を冷やしていた冬の水ではなく、温んできた春の水だ。見つめる作者の目は優しい。春の水のしなやかさ、明るさを感じる。

二句目、モネと言えば、フランスを代表する「印象派」の画家の一人。外光の明るさや色彩を重視し、屋外で作品を描いた。作者は「モネの絵のひかり」を初秋の澄んだ空気の中で感じ、「触るる」と表現した。モネのどの絵を指しているのか、久しぶりに画集を開き、「ボブラ並木 秋」を鑑賞してみた。

三句目、季語「白露」は太陽暦9月7日頃、この頃から秋気が加わる。時どき飼っている亀を洗ってやる作者、この日も水槽から出した亀を洗いながら、今日は白露と思ったのである。日常の暮しの一齣だが、「白露」の季語によって俄然面白い場面になった。中七の切れの効いた端正な句となった。これからも自分の感覚を信じ、俳句を楽しんで下さい。



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に門構え（門）の付く漢字を入れてみましょう。

- | | | |
|----|----------------|-------|
| 1 | 卯の花をかざしに□の晴着かな | 松尾芭蕉 |
| 2 | 三千の俳句を□し柿二つ | 正岡子規 |
| 3 | 春の雪青菜をゆでてゐたる□も | 細見綾子 |
| 4 | 身に入むや亡妻の櫛□に踏 | 与謝蕪村 |
| 5 | 御□帳おん身火傷の新羅仏 | 内海良太 |
| 6 | 春風や□志いだきて丘に立つ | 高濱虚子 |
| 7 | 応々と言へど敲くや雪の□ | 向井去来 |
| 8 | 北窓を□き峠の見ゆるかな | 滝沢伊代次 |
| 9 | 乱菊やわが学□のしづかなる | 山口青邨 |
| 10 | 安達太良とその空残し牧□す | 柏原眠雨 |
| 11 | 暗がりに□王おはす桜かな | 飛高隆夫 |
| 12 | 黒堀もまぎるるほどの木下□ | 鷹羽狩行 |

【正解】

- | | |
|----|---|
| 1 | 関 |
| 2 | 関 |
| 3 | 間 |
| 4 | 関 |
| 5 | 開 |
| 6 | 関 |
| 7 | 門 |
| 8 | 開 |
| 9 | 間 |
| 10 | 関 |
| 11 | 関 |
| 12 | 間 |

おいしい俳句

第3回 嵐山光三郎

朝刊を大きくひらき葡萄食ふ 石田波郷

朝早く届けられた新聞の朝刊をバリバリと開くと、活字印刷の匂いが漂ってきて、大きく息を吸って記事を読む。目がさえてくる。昭和十三年（一九三八）に國家總動員法が公布され、日本は戦時体制下にあった。中国の徐州城を占領し、二年後の東京オリンピック大会は中止となった。

「贅沢は敵」とされ、白米を食べることも禁止。

そんな時代に葡萄を食べていいのだろうか。このころの葡萄は小粒ですつぱく、贅沢とはいえないが、軍部に対する意地もあつて食べるという反骨の気分もある。

昭和十四年刊の波郷の第一句集「鶴の眼」（沙羅書店）には、「路地照れり葡萄の種を吐きて恥づ」という句もある。

七、八粒まとめて食べ、種を吐いた行為を反省している。波郷は大正三年（一九一三）愛媛県松山市生まれ、橄欖、草田男らとともに人生派と称せられた。三十歳（昭和十八年）のとき召集され、中国華北山東省に渡り、野戦病院に入院後帰還し、五十六歳で死去。東京都下の滑瀬村療養所へ入退院をくりかえし、「即刻」なる句をめざした。

写しとる行為以前の稲光りする直観が波郷の息で、そこに人間の命が輝いている。

公益団法人俳人協会

北から南から

佐倉——豆知識

千葉 三屋英俊

内海良太・保子両先生が佐倉に「うすゐ句会」を発足させて今年で35年。今回はその佐倉に関するトリビアです。

万葉集と佐倉

佐倉周辺は上代「印旛郡」と言われていました。「万葉集」(巻二十)に下総国防人の歌として「潮船の舳越そ白波にはしくも負ふせたまほか思はへなくに」があります。歌意は「海路を行く船の舳先を超えてくる白波が突然であるように、「防人になれと急に」命令なさるのですか。思ってもいなかったのに」です。この歌を刻んだ歌碑が印旛沼の畔にあります。

印旛沼と佐倉

市民の憩いの場として親しまれている印旛沼。吉川英治の歌碑もあります。「萱屋は母のむねにも似たるかな高きを忘れただぬくもれり」英治の母の実家が佐倉なのです。

オリンピック女子マラソンのメダリスト、高橋尚子、有森裕子もこの沼辺を走って練習。「金メダルジョギングロード、尚子コースと裕子コース」があります。二人を指導した小出監督の自宅が佐倉にあり、ここを指導拠点にしていたのです。

小林一茶と佐倉

一茶は何度も佐倉を訪れています(享和3年・文化3年他)。文化7年に印旛沼を詠んだ句があります。

〈沼太郎としはいくつぞ夕涼〉〈永の目を涼んでくらす浮巢哉〉。文化14年には、白井に住む俳人高橋広陵を訪ね、饒別として金百疋をもらっています。

順天堂と佐倉

佐倉藩主、老中堀田正睦は、蘭医佐藤泰然を佐倉に招き順天堂(順天堂大学の礎)を開き、蘭学による先進医療を行いました。「西の長崎、東の佐倉」と言われる所以です。城址公園には堀田正睦像と初代米国駐日総領事ハリスの像が向かい合って立っています。日米修好通商条約を締結した二人です。

津田梅子と佐倉

佐倉藩出身の学者津田仙の次女梅子。日本初の女子留学生として渡米。英語教育に尽力し、女子英学塾(後の津田塾大学)を創設。令和6年新5千円札の顔として選ばれました。

正岡子規と佐倉

子規は佐倉を2度訪れています。明治24年、25才「房総旅行」の時。この時は東京から徒歩で市川、白井、佐倉へ。道中「揚雲雀下に葉ばたけ麦畠」。この時佐倉惣五郎神社に参拝(梅散りて何をささげん神の前)。3年後総武鉄道の開通に合わせ汽車で佐倉再訪。城址を中心に散策。(常盤木や冬されまざる城の跡)。その句碑が城址公園に立っています。

内海良太名誉主宰を悼む



既報の通り、令和7年1月26日、「万象」名誉主宰を務められた内海良太氏の逝去の報に接し、私たちは深い悲しみと大きな喪失感に打ちひしがれました。

「風」の時代から俳句に親しまれ、古今の文献を渉猟すると同時に、各地の俳枕・歌枕を訪ね、その足跡は敬愛していた河合曾良の跡を慕って対馬にまで及びました。その時に得た感銘は、最初にして最後となった句集「青嶺」に「青桐や宗家文書に曾良のこと」の一句に見ることが出来ます。

現役時代は、日本航空の運航管理者として乗客と乗員の命を預かる業務に心血を注ぐ日々。「風」終刊ののちは主要同人として、「万象俳句会」の発展のために精魂を傾けられ、編集人として、主宰として、常に暖かな目配りをしながら私たちをあるべき方向へと導いてくださいました。晩年には名誉主宰というお立場で、大所高所から常に主宰をはじめとする要路の同人を束ねてくださったのです。

本号では、江見悦子主宰をはじめとして、様々な形で深い関わりがあった同人の追悼文と、氏の代表句を掲載し、故人を偲び、感謝と哀悼の念を表することと致しました。

略歴

内海良太（本名・良雄）
うちうみりょうた

昭和13年10月19日 東京都生まれ

昭和54年 「風」入会

昭和58年 転勤により新田祐久氏

指導の小松句会に参加

昭和62年 「風」同人

平成4年 風賞受賞（松枝岐村）

平成14年 「風」終刊により

「万象」創刊同人参加

平成19年 「万象」編集人

（平成28年3月まで）

平成28年 「万象」主宰

（令和4年3月まで）

令和4年 「万象」名誉主宰

この間、俳人協会評議員などの要職を歴任

員などの要職を歴任

令和7年1月26日 逝去享年87

弔 辞

主 宰 江見悦子

内海良太名譽主宰の突然のご逝去に、私ども「万象」の仲間は暗然とし、悲しみを深くしています。この場を借りて名譽主宰を偲び、お別れを申し上げたいと思います。

良太先生、私が親しくご指導を受けるようになったのは、「万象」の編集に入った14年前でした。編集長としての敏腕ぶり、第三代主宰としてのご活躍、名譽主宰として盤石の存在に、常に心服し敬愛の念を抱いて参りました。

先生は、昭和54年40代で「風」に入会し、62年に同人、平成4年に「桧枝岐村」で風賞受賞、「風」創刊五百号記念文章の部では「岩波庄右衛門正字―曾良・奥の細道の旅以降―」をまとめ佳作を受賞されました。「創刊五百号記念特集号」の「風」新鋭作家群像（宮岡計次筆）を読み直してみても、先生を紹介した次の文章に驚きました。

「その感性の斬新さと彫琢の探求心が魅力だ。とにかく屈指の行動派で、歴史にも詳しい」「作風は穏やかながら表現の切れ味がよく、深い。可能性と情熱を秘めた新しいタイプの俳人である。環は磨きぬかれてはじめて光を放つ」

50代初めの先生についてのこの評は、そのまま、先生の

人となりと魅力を私たちに伝えてくれます。

思えば、先生は「即断即決・即行の人」でした。

航空機の運航管理者の経験からか、スポーツマンとして身に付けた身体感覚からか、事を決めるにあたってためらいがなく、率先して実行なさる方でした。その切れの良さは、俳句の切り口のいさぎよさ、新しみに通じるものでした。

先生は「学ぶ人」でした。

ご自宅にお電話すると奥様の保子さんから「図書館に行っています」というお返事をしばしば聞きました。恐らく「万象」の大会等での講演、「万象」誌への執筆のための、緻密で周到な準備の時間だったのだと思います。先生は「情の人」でした。

人との交わりを大切にした優しく温かな方でした。

「万象」誌や句会での選評では先ず作者を重んじ、要点を衝いた軽妙な良太節を聞くことが出来ました。北から南まで赴任先各地で培った人脈は幅広く、実体験に基づいたお話が楽しみでした。

水飲んでさて獅子舞のうしろ脚

今年の初春を飾ったこの句、主役は勿論うしろ脚ですが、詠まれない場面には獅子頭の活躍があり、この獅子頭こそ先生ご自身だったのではないかと思います。「万象」の獅子頭として、私共を束ね引つ張って下さったご労苦とご指導に心からの感謝を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

良太さんと空也

名譽顧問 小林愛子

今年の俳人協会発行の俳句カレンダーに、去る1月26日にご逝去された内海良太氏の句の短冊が、1月の紙面を飾っていた。〈水飲んでさて獅子舞のうしろ脚 良太〉。特徴ある文字も懐かしく、華やかで楽しい句であるだけに一層の無常迅速の思いを嘯みしめている。

「水飲んで」の句、調べがよくて思わず口ずさみたくなる。「さて」という言葉の働きもあって江戸小唄の雰囲気を感じさせ、伝統俳句とは一味違う、芸の技というもののが力を發揮している。私には及びもつない彼の個性に気付いたのは、少し前のことであつた。

平成10年2月28日・3月1日と、京都で「風」の同人総会が開かれた。吟行地には二条城・北野天満宮・六波羅蜜寺他。総会後の句会で、沢木欣一先生の特選を獲得したのは〈空也像口より伸びしフリージア 良太〉(原句のまま)であつた。私は呆氣にとられて拍手も忘れていた。他の選者の選が見当たらないので、私の記憶違いでなければ欣一選一句のみの入選であつたと思う。気が付けば辺りは拍手とざわめに包まれていた。

空也(903-972)は平安中期の僧、誦念仏の祖。パンデミックに苦しんだ平安中期。疫病退散を命じられた空也上人は自らの命も顧みず病人を介抱、あわせて南

無阿弥陀仏の念仏をもつて仏教教化に当たつたという。沢木先生に「空也」の文がある。

「空也像は口から六字の名号を吐く類のない鎌倉彫刻で写実の緻密さは驚くべきものがある。運慶の四男康勝の作。左手に鹿の角の杖をつき、右手で胸にかけた鉦を撞木で打っている。その目な差しは虚空をさまよっているように見えた。」(『風木舎俳話』(251)より抜粋)

先生は彫刻の写実の緻密さに感銘している。

空也像の口から現れる六体の阿弥陀仏は、空也上人が「南無阿弥陀仏」の名号を唱えたと阿弥陀如来に変わった伝承を表しているという。学名Freeisia refracta Klatz, refracta という意味らしい。フリージアの茎が反転して花が直立するところは六体の阿弥陀仏にそっくりである。良太氏は稲妻のような反応を見せた。欣一先生の批評を聞きかかったが、何故か記憶にない。

「風」はこのころ子規を特集しており写生に対して関心が深かった。彼が躊躇せず(たぶん)フリージアを取り上げた事こそ持ち前の感性なのである。本人は感じたままと言うだろう。そもそも「空也像」の句は伝統にいての前衛なのだろうか、風狂と呼ぶべきなのだろうか。自在の境地をただただ眩しく見るばかりである。刺激のある句はもう見られない。良太さん、ながい間本当に有難うございました。

憧れの人

編集長 中村千久

平成26年から「万象」編集部末席に加わることになった。下町にある都立高校の同窓会館2階の和室にテーブルを並べて、月に一度の編集会議が開かれていた。コロナ禍前のことで、紙原稿のチェックや整理が行われていたのも、オンラインでのやり取りが主流となった今では懐かしい。

編集部員の作業が半分ほど進むころに、内海主宰（当時）が会場に現れる。和菓子や季節の果物を提げて、「おお、ご苦労さんッ！」と気さくに声を掛けて、正面の定位置に腰を下ろされた。新米の私には眩い存在だった。

原稿の整理が終わると、次号以降のスケジュールや紙面構成の話になる。ホワイトボード上に、独特な筆致で表や図を描き、頭の中にしまわれているアイデアを私たちに示して下さった。航空管制という一分一秒を争う現場が現役時代の主戦場であっただけに、すべてにスピード感があり、内容は簡潔明瞭だった。今より少しばかり若かった私の目には、そのすべてが魅力的なものとして映った。「複雑なことはシンプルに、易しいことは丁寧に！」そんな言葉も新鮮だった。

編集会議からの流れで食事を共にする機会にも恵まれた。編集の仕事や俳句の話もあったけれど、私を大いに

楽しませたのは地方勤務をされていたころの数数のエピソードだった。石川県の小松空港にいらしたころ、大雪に見舞われた滑走路の除雪作業を、同居する航空自衛隊の隊員にひよいと声を掛けて頼んだところ、後になって基地司令から呼び出しがあつて「勝手に軍隊を動かすとは何事か！」と大目玉を喰らったこともあったとか。「あれには参った！」と、細い目をさらに細めて笑いながら話して下さった。あの表情も、あの声も、記憶のなかのものになってしまった。

編集部に入って暫くは、私も「内海主宰」と呼びかけていたが、あるとき「千久さん、これからは千久―良太でいこう」と言われた。蕪村に傾倒した人だから、分け隔てのない句座を楽しんだというあの俳人の平らな人付き合い合いにも倣うことが多かったのではなからうか。お互いの共通の趣味が、落語や映画だったから、そんな話を気楽にしたいという思いもあったのだろうと思う。だからそれ以来の私は、句会の席でも、恐れ気もなく「良太さん」と呼ばせていただいていた。良太さんは、俳句においても処世においても、憧れの人となっていた。

句集「青嶺」が上梓されたとき、「万象」誌に鑑賞文を書かせていただくことになったりもした。格調の高い俳句、そして思わず吹き出したくなるような軽みの俳句。俳諧自由の芸をたっぷりと見せて下さった。それらを繰り返して読みながら、いつしか良太俳句に引き込まれていった。あの拙文のタイトルを「即物具象と豊かな詩藝」とした所以である。

合掌

熱慮決断の人

顧問 福島せいぎ

毎年正月になると、八畳の書斎の壁に俳人協会発行のカレンダーを掛ける。今年巳の年の1月の見開きに内海良太さんの代表句「水飲んでさて獅子舞のうしろ脚」が載っている。カレンダーのその他大勢の一句欄に載るだけでも嬉しいのに、墨蹟鮮やかな短冊が実物大でカラー印刷されている。「万象」の仲間として、今年はきつと好い年になりそうだと喜んでいた矢先に、良太さんの計報が入った。昨年10月の「万象」の大会には欠席されていたが、大したことはあるまいと思っただけにわが耳を疑った。

内海良太さんと私とは同い年の寅年生まれである。

「風」「万象」を通じて長いお付き合いをいただいたが、「風」の同人になったのも私が昭和60年、良太さんが62年によく似ていた。二人共まだ40歳代であった。「風」時代は、私も良太さんも大先輩の陰に隠れていたが、「風」終刊後の「万象」の時代になり、二代目主宰大坪景章さんの頃に、良太さんと会う機会が増えた。

良太さんは「万象」の編集人として重責を負われ、編集、企画、運営などすべての面で敏腕をふるわれた。私は中山純子さんの後をうけて同人会長になったが、金沢での大会のときに、ご自宅で療養されていた純子さんを

お見舞いするために、急遽会場から連れ出してくれたのも、良太さんのはからいによるものであった。純子さんとはご自宅の玄関先での出会いとなったが、私を立ててくれて、ご自身は後ろに控えておられた。純子さんとはこの時の出会いが最期となったが、純子さんの手のぬくもりと、「万象」をよろしくね」との言葉は今も耳に残っている。

良太さんは、このように思いやりの心を実行に移すことのできる人であった。良太さんが景章さんの後をうけて「万象」三代目の主宰に就かれたころは、どの結社も会員の高齢化と会員減に苦しんでいた。今もこの流れは変わらないが、良太さんは時代の潮流をすばやく読み取り、「万象」を盤石のものとした。「風」時代から通例となっていた春の同人総会と秋の大会を一本化したのも良太さんの決断であった。私は徳島に住んでいるので、年2回の東京行きを楽しみにしていたが、良太さんの決断が正しかったことは昨年の大会で証明された。

「万象」は良太さんから四代目主宰の江見悦子さんへと禅譲されたが、その時のお便りに「万象」はもう大丈夫です。ご安心ください」との一文が添えられていた。良太さんは実作のみならず、芭蕉、蕪村への造詣も深かった。私も学生時代に蕪村周辺を専攻したので、あの世の句座で語り合えることを楽しみにしている。

内海良太さんの思い出

顧問 柳澤宗正

私は、内海さんが平成28年10月末に「万象」の第3代主宰に就任されたのを機に、翌翌年の平成30年4月同人会役員の改選時に内海主宰により同人会会長に推挙された。以来、内海さんが主宰を退任されるまでの4年間（副幹事長の1年間を含めると5年間）、一緒に仕事をさせて頂いた。その間、内海主宰の発案で以下に述べる新しい企画が実行に移された。その背景には江見編集長（当時）のアドバイスもあって平成28年7月に同人会（福島せいぎ会長、内藤恵子幹事長の下、副幹事長の私が担当）で実施した全同人に対するアンケートが存在する。当時の内海副主宰も、このアンケートで明らかにあった同人会のみならず「万象」俳句会全体に関わる諸課題を十分に把握されていたと思われる。

新企画は、（1）「万象会議」の新設と毎月開催。この会議には内海主宰、小林副主宰、江見編集人、会計の竹澤さん、総務の内田さん、それに同人会から私が出席。これによって「万象俳句会」と「同人会」の意思疎通がスムーズになり、「万象」全体の運営が改善された。また、この「万象」会議で「万象俳句会」の収支報告が竹澤さんから毎月なされるようになり、会計、財務の現状や将来の見通しが共有されるようになった。（2）「中山純子記念俳句賞」の新設。（3）「万象」誌の改善策とし

て「同人会だより」や「珈琲タイム」（のちに「珈琲ぶれいく」）の新設。「同人会だより」では同人会の行事の外、全国の支部の活動や同人の動向などを掲載。（4）同人会総会と全国俳句大会の合流。

これらは現在の「万象」に引き継がれ、更に充実しているが、内海主宰の決断と功績が大きい。少子高齢化の影響で会員数の減少に歯止めをかけることはかなわなかったが、困難なコロナ禍を無事に乗り越え、次の有力な若い世代にバトンをスムーズに渡せて良かったと思う。私は同人会会長として内海さんの手足となって全国俳句大会や同人会総会ほか諸施策のお手伝いが出来て幸せだったと思っている。同人会で当時一緒に仕事をされた中條睦子さん（副会長）、吉中愛子さん（幹事長）、古川京子さん（副幹事長）、奥太雅さん（会計）他の幹事の方

方も、同じ感慨をお持ちと思う。
なお、内海さんが退院された昨年10月8日にお見舞いのメールを差し上げたところ、翌日早速返事のメールを頂いたが、これが図らずも最後のやりとりになってしまった。

最後に、内海さんと苦楽を共にされ、ご協力を頂いた内海保子さんに深甚の謝意を表するとともに、この度のご夫君の急逝に対し心よりお悔やみを申し上げ、故人のご冥福をお祈り申し上げます。

北海道支部俳句鍛錬会での思い出

松原智津子

平成29年6月17、18日の二日間、当時の内海主宰と飛高隆夫万象作品選者を始めとする一行10名を札幌に迎え、総勢32名、待ち望んでいた鍛錬会を行いました。

初日は遅咲きのライラック、ニセアカシアの花、今盛りの山法師が待つ北大植物園を吟行、次いで句会。内海主宰は

日陰には日陰の白さやまばうし

ハスカップ摘んでは囁んで夏帽子

などの句で最高得点を獲得。この時の報告文を書いた落合裕子さんによると、「高得点句に佳句なし」と謙遜なさったそうですが、今となつてはその真意を確かめられませんか。二日目は貸切りバスで中山峠を経て洞爺湖の景観を望み、支笏湖経由の旅程で札幌に戻り、句会と親睦会。

この鍛錬会中、主宰の立場で、素直さ、感動を大切になど「万象」の目指す俳句を句評に込めてご指導下さいました。直接お会いすることのない地方の会員にとつて、分り易い説明とそのお人柄に触れられる、またとない機会でした。滞在中、日常生活のなかでの古本屋巡りに触れ、雑誌の為の取材に余念のないこと、些細なことや人の発見に興味を持つ楽しみなど、何気なくお話されたひと時が、個人的に懐かしく思い出されます。謹んでご冥福をお祈りいたします。

ありがとうございました 内海さん

大木 茂

平成29年11月25日、当時の内海主宰ほか「万象」誌発行に携わる有志と、佐野市内の同人・会員29名が参加し、「万象」栃木鍛錬吟行句会が行われた。三龜山庭園を吟行後、佐野駅近くの城山記念館で句会が開かれた。主宰は、〈三龜山へ行く日マフラー新しく〉など3句を詠まれた。

1月29日、この会場で行われていた県内の「万象」栃木の葉会員による新年句会の最中に、内海さんの計報が届いた。会場は、暫し言葉を失ってしまった。当時参加した人たちの集う句会場に計報が齎されることを誰が想像したでしょうか。

平成8年1月、「栃の葉」新年俳句大会に内海さんをお迎えし、「三冊子を読む」と題する講演をいただいた。翌日、遠くに快晴の男体山を望む園場の中に自噴する池などを巡り、句会を行った。帰途、足尾鉾毒事件にゆかりの館林・雲龍寺に立ち寄った。内海さんは、足尾鉾毒事件に強い関心を持っておられ、一昨年、渡良瀬川沿岸の被害状況資料をお送りしたところ大変喜ばれ、機会をみて現地を歩きましょうと約束いたしました。しかし、叶わぬまま逝かれてしまいました。本当に寂しい限りです。内海さんが佐野を訪れた折は、私の車に同乗され、道中、いろいろなご指導をいただきました。本当にお世話になりました。どうぞ安らかに眠りください。

良太先生と北陸

中條睦子

自由に大胆に

前田貴美子

内海良太師には、昭和59年ころ石川県の小松空港勤務の数年があった。小松在住の新田祐久先生に師事し、「客観写生」「即物具象」の俳句に磨きをかけられた。そんなご縁で中山純子先生とも交流があり、先生は「良太さん」と親しみをもって呼んでいらつしやった。

この頃の作品に右の一句がある。

冬 澗の見ゆるロビーにロシアの絵

まだ、先生にお会いしたことのない時期、「風」の句を勉強途上にあった私は、この一切の物を削ぎ落とした、眼前の景だけの一句に強く惹きつけられるものがあつた。

空也 像口の中よりフリージア

京都での「風」の同人総会の折、沢木欣一主宰の特選になった吟行句だった。念仏を唱えて歩く空也の口から六体の阿弥陀仏が顕れたという伝承を具象化したもので、一度見ると忘れられないインパクトがある。その光景を、春の訪れを告げるフリージアに喩えられたのである。斬新で新しみのあるこの一句に驚きと憧憬を抱いた記憶が、昨日のことのように思い出される。

平成20年5、6月号の「万象」誌に連載された、「中山純子顧問に聞く」のインタビューに、春まだ浅い金沢にお一人で来られた。綾子との出会いなどに傾き、取材をしてゆかれたことが今でも懐かしく思い出される。

空也像口の中よりフリージア
衝撃的な出会いでした。平成10年、「風」同人大会で、欣一特選句だったと記憶しています。

写生、即物具象を「風」で学んできました。御句、上五中七の写生。そして空也の口の仏たちを「フリージア」と大胆な把握で詠む。良太俳句には自由な心が、眼差しがあります。写生句が、こんなに自由に楽しめるのだと知りました。

平成17年、敦賀での「万象」同人会総会で、「これからの俳句―写生を深める」と題して、基調講演の機会をいただきました。無事役目が果たせるか、心配された良太先生が、お声をかけて下さいました。

「ほくが一番前の席にいるから、ほくだけに話すつもりで話したらいいよ。沢山の人がいることは忘れてね。」
写生の大地に育つ万象の森に、多様な樹樹が花が自由に育って欲しい……。私の写生への考えを、良太先生がどう受け止めて下さったかは解りませんが、あの日の「フリージア」がいつもどこかにありました。那覇の「ふう」という小さな酒場では、欣一、伊代次、景章の御句と共に、良太先生の御句が、ふう句会の仲間たちを見守って下さっています。

みやらびの島唄といふこゑ涼し

良太先生の思い出

沢辺たけし

大きな恩人良太先生

内田郁代

私が初めて良太先生にお会いしたのは、26年前の平成11年の秋、「風」千葉俳句大会の事前吟行で船橋の三番瀬に行ったときです。遠くに富士が見える風の強い日で、同じ句会の先輩から、あの方が内海良太先生と教えられました。海辺に立っていた逆光の中の引き締まった表情を今も覚えています。大坪景章先生を知ったのもこの時で、俳句を始めて一年も経っていない頃でした。

良太先生の指導を直接受けるようになったのは平成17年に「万象」千葉句会へ入ってからです。平成25年には千葉県支部長になりましたが、未熟な私を励まし引っ張ってくれたのが良太先生です。千葉県支部の主な活動は千葉句会の運営と支部主催の俳句大会ですが、会員が句会に休まず参加していただくためのアイデアを教えてくださいました。ありがとうございました。しかし、なんといつても心に残っているのは、句会でのユーモアを交えた講評です。俳句への造詣の深さ、古典の知識は勿論ですが、各地の有名な行事にも精通していました。

良太先生の句集「青嶺」のあとがきに「実作面では、『俳句は抒情より認識の詩』は未だ勉強途上……」とあります。師である沢木欣一先生の目差ししたところを良太先生も目差していたからこそ言葉だと思えます。

先生のお加減が気になりながら明けた正月、1月10日、千葉句会の前日に夫人の保子さんに電話をした。お疲れの様子を保子さんが、ぼろりと「皆と俳句をやりたい、と涙してるよ」とこぼされ、電話口で二人で泣いた。

「万象」を、ここまで育ててくださった大きな存在だった。「気宇壮大に志を高く」をスローガンに、三代目主宰として、即物具象に基づく写生を基本に、「新しみのある俳句を」と指導して下さった。三代目と言いながら、実は創刊当時から中心となって携わってこられた。木暮剛平先生の事、横井博行先生の事、滝沢伊代次先生の事、時折、ぼろりと話してくださった。さり気ない氣遣いをされ、物事はしつかり準備して楽しむ事などは、全国大会で、多くの方が氣付いておられたと思う。歴史がお好きで、芭蕉や蕪村がお好きで、郷土、佐倉を大事にされた先生を常にならで見守り、敬愛し、支え続けた保子さんを氣遣う先生の「保子さんを頼むね」の声がある。大切な友人として、大事にしますよ！ 先生！

忘れられない一句

空也像口の中よりフリージア

合 掌

良太さんを偲び

中嶋久登

私どもの会（日航俳句会）は今「七十周年記念俳句集」を編集中です。良太さんからは昨年12月19日、まだ体調が不安定な中にもかかわらず、過去に発表された好きな作品として次の投句がありました。

春火鉢

狂言の鬼が出を待つ春火鉢
箒目に力ありけり朝桜
をんどりとめんどりがあてあたかし
雪溪を講の 一列横切れり
認識と抒情の間に豆を打つ
落ち鮎のちひさな息が掌に
ピアノ鳴る侘助垣のはなれより
水廻るる頃や中村哲氏の忌
水飲んでさて獅子舞のうしろ脚

上総丘陵地

雲海の九十九谷や初日影

常に前向きに事を判断され、相談にも「ダメ」「できない」という言葉は出ず、「何かあったら言ってくれ、やるから」という言葉が返ってきました。

今「万象」会員が11名（うち同人8名）おり、いずれも良太さんのご指導の下、今日に至っております。

在りし日のお姿を偲びつつ、ご冥福をお祈り致します。

アカデミックをみんなで楽しく

三屋英俊

私が「うすめ句会」に参加して18年、良太先生から頂いた資料等を綴った「良太ファイル」（句の添削や勉強会の教材、記録等）が16冊、私の宝物として手許にあります。良太先生はいつもアカデミック且つアグレッシブに、句会、吟行、勉強会、フィールドワークなどで私達をリードして下さいました。特に「古典文学を楽しむ会」（地元密着の寺子屋風良太塾）は良太先生自らが纏められた資料を使つての分かり易い勉強会。「おくのほそ道」に始まり、蕪村、一茶、利根川図志、古事記、方丈記、竹取物語、伊勢物語、土佐日記……羅列するとベリジがなくなります。

勉強会が楽しいのは、実は良太先生ご自身学ぶことが大好きで楽しくて、皆とこの楽しみを共有するのがうれしかったからだと思います。テーマの勉強が終了した時には、生徒と一緒にその芝居をやりました。脚本と小道具調達は良太先生。幕が下りると全員で花笠音頭を踊つてメ。又、勉強したテーマに沿って、ゆかりの地を訪れたりもしました。下館・結城行では、蕪村の「宇都宮歳旦帖」（幸鳥が初めて蕪村を名乗った）と一緒に確認したことや、弘経寺の貉堂を覗いたことなどが忘れられません。私のリタイア後の人生をとっても豊かなものにしてくださった良太先生。言葉では言い尽くせないほどの感謝の気持で一杯です。どんなに感謝してもしきれません。

句集「青嶺」 自選48句

梅鉢の幕の中より初鼓

雪嶺ををんな指さす有磯海

立山

雪溪を講の 一列横切れり

鉄棒に稲干す教師宿直明け

冬薺の見ゆるロビーにロシアの絵

白山の胡桃持ち寄り報恩講

白峰の分厚き板の冬構へ

白山麓尾口村

冬館灯して木偶の文弥節

産院の窓よりどつとシャボン玉

梧桐や宗家文書に曾良のこと

ご開帳おん身火傷の新羅仏

白山麓小原

山焼の足拵へに昂れり

狂言の鬼が出を待つ春火鉢

小豆干す東海道に莫塵広げ

丹波 二句

時雨来て土の匂ひも氷上郡

鬼貫の町の高塀寒造り

加賀・越中

(昭59〜平6)

着ぶかれて四天王寺の西の門

初日影砂丘に育つ松の苗

初夢や銃持たされて市街戦

阪神淡路大震災

水背負つて霜と瓦礫の町見舞ふ

葉月さん

春炬燵のふとん短め日吉館

文楽のピラがひらひら桜餅

和歌の浦夕立過ぐれば潮招き

斎王の硯のくほみ春の蟬

松阪

鈴屋の鈴のいろいろ松の芯

花田牛祓ひの塩に舌伸ばす

箱を出て畳の上の難かな

植ゑながら田水眩しと眩けり

辺戸岬

うりずんやみやらび句碑と小半日

オーデコロン黒人姉妹歌ひ出す

将門の塚に五六騎茄子の馬

田の神の帰り支度は稲架の蔭

廓町道が乾けばまた時雨

松の苗

(平7〜平14)

花ゆうな

(平15〜平18)

段ボールの底が抜けさう瓜の苗

三澤たきさん出版記念

松茸 飯 百三歳の翌鏝と
大日如来光りて御座す徴の寺
田仕舞の風呂を熱めに焚きにけり
切火して仕事始の鍛冶の妻
ほろ市にほろのごとくに疲れたり
初夢やナチスに追はれ屋根伝ひ
みんなの祝詞のやうな歌ひ出し
茂吉忌の朝やバケツの薄氷
かぶと虫鎧は井伊の赤備
雉の声少し破れてゐたりけり
雪晴の牛ながながと啼きにけり

松虫寺

霜柱皇女御廟にかぐはしき
祭馬どうしていいか分からぬ眼
認識と抒情の間に豆を打つ

ほろ市

(平18~平20)

燕子花

(平21~平24)

祭馬

(平25~平28)

句集「青嶺」補遺22句

対馬 二句

海道に青嶺寄せあふ記紀の島
雲丹めしや石屋根の村祝ひごと
簾よりをんな水捨つ運河べり
鯛やザラザラと打つ袖が蕎麦

保子さん

げんげ田に旅のをんなが飛び降りる
空也像口の中よりフリージア
あたたかや孔雀は羽の鈴鳴らし
芋もつて勝手口より月の客
寒の水ころころ通る軍鶏の喉
みやらびの髪に挿したる花ゆうな
市振や尾花の先の波がしら
踏んづけてまた踏んづけて落葉籠
女正月山かけ井でお開きに
羽抜鶏呼べばとつと走り来る
おひねりの笹ごと飛んで村芝居
二日はや夫婦蕎麦貼り合へり
民宿の特別室の蠅叩
水飲んでさて獅子舞のうしろ脚

知立

風吹けばどれも綾子の燕子花
屋根裏の出窓が開いて秋のばら
滑りよき竹の靴べらとろろ汁
をんどりとめんどりがゐて冬温し

「鶺鴒の声」抄

「俳句界」(2017年4月号)

獅子舞の己が尾を噛むめでたさよ
雛の間に雛のやうな少女かな
五月晴れ月山かぎりなく近し
若鮎の堰上るとき光りあふ
祭 笛 臂 衰 へ し 鳶 頭
銭湯の隅に祭の捨て草鞋
古寺の礎石ぐらぐら蟻地獄
水漬たる稲抱き起し抱き起し
炭焼の生の檜木の重たさよ
暮れてすぐ沼は真つ暗鶺鴒の声

「万象」誌より 20句

(平成29年〜令和6年)

若冲の鶏が見得切る新暦
河童忌や田端の深き切通し

「万象」全国俳句大会有志演劇

秋の夜や蕪村の恋は厄介と
古文書の祝儀の次第松の花
村ぢゆうが水の匂ひの田植どき
輪飾や実生の松も老松も
春隣志功菩薩の頬ピンク
白粥にえびすめ春の風邪心地
春すでに鳩居堂まで来てゐたる
火の神と疫病神に菖蒲茸く
重き辞書婆娑と閉づれば微句ふ
初霞女峰の胸のあたりまで
初蝶と思ふ目の前過ぎてより
ひまはりにざはざははの風吹けり
初筑波勾玉いろに輝ける
木簡の太き米の字秋高し
初景色常陸平野に山ひとつ
調教の馬の睫毛に霧の粒
虫の夜や虚実半ばを五七五に
瓢の実を吹く息足らず入院す

飛高先生茶毘 内海良太主宰と

行く秋や良太と拾ふ小さき骨

〔花遁路〕202

令和2年(2020)の10月16日、俳句の師であり、
 齢の離れた兄のような存在だった飛高隆夫先生を突然
 に失うことになってしまった。

コロナ禍での葬儀になった。ご生前からこんな時の
 一切を託されていた私は、盛大とはゆかないまでも出
 来るだけのことをして送って差し上げたかった。10月
 22日の葬儀には、大学関係者や「万象」の面々が駆け
 つけてくださり、先生とのお別れをしていただけた。

茶毘に付された先生の御遺骨と火葬場で対面し、骨
 揚げをしたときのことを詠んだのが掲句である。当
 時「万象」主宰だった良太さん(平素から恐れげもな
 しに、「良太さん」と親しんで呼ばせていただいていた
 た)と一緒に骨を拾わせてもらうことになった。

「千久さん、この小さいのを拾おう。大きいのはみ
 んなが拾ってくれる」

と、良太さんが言った。その小さな骨がどの骨かは
 分からなかったけれど、83年間、故人を支えてくれた
 ものには違いないというのだった。良太さんのそうし
 た思いが、哀しみに打ちひしがれていた私の心に、や
 けに沁みだ。

* ページ調整のための埋め草として、不定期に掲載します。

最近の名句集を探る

座談会

蒲原ひろし『愚戦の傷痕』

大西朋

鈴木しげを『普段』

司会 筑紫磐井

広渡敬雄『風紋』

藤本美和子

渡部有紀子

第25回「俳句四季」

好評連載

全国俳句大会

予選通過作品発表

巻頭三句

星野高士／森清 堯

高橋千草／柴田多鶴子

鴻野真知子／降旗牛朗

今月の華

董振華／野崎海芋

俳句と短歌の10作競珠

渡邊新月＋藤井万里

『LONZO』私の源流

鍵和田柚子

磁石・篠崎央子

人と作品

『澤田和弥句文集』

岸本尚毅／庄田ひろふみ

高井楚良／日下野由季

成瀬政博

筑紫磐井

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、

俳人の響き

大西朋

俳句のまなざし

井上泰至

俳句の詩語

イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸

古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

堀田季何

諸家書架

二ノ宮一雄

一望百里

俳句四季

Haiku Shiki

2025年5月号

4月19日発売
定価1100円(税込)
<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版
 〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

温故知新 江見悦子

「俳句界」より転載
(2025年4月号)

初心の頃

筆者が俳句を始めたのは、友人の誘いで新しく出来た句会に参加した時。「風」主要同人の辻通男・大坪景章両先生の指導の下、月二回の句会が減法楽しく新鮮だった。一年後には「風」に入会し、沢木欣一・細見綾子両先生の門下となった。

句会では、「先ず感動」「感動があつての写生」「定型と季語の大切さ」「言葉は単純・平明・的確に」と基本を繰り返して指導された。沢木先生の選評は「素直な句」「具体的な句」「感覚的な句」等、短いものだったがずっと胸に落ちた。各地への吟行もしばしば企画されて人付き合ひも濃くなり、いつの間にか「風」のエネルギの渦に巻き込まれ、ここで俳句を続けたいと思うようになった。

「風」から「万象」へ

「風」は一代限り」とされた沢木先生のご遺志で「風」が終刊した後、平成十四年「万象」が創刊された。初代滝沢伊

代次主宰は「古きに縛られず、風潮におもねらず、質実な写生を通して、自由闊達な句風を目指すため『万象』を創立した」と述べ、「感性を磨き、技巧を戒め、個性豊かな作品を通じて、森羅万象の生命の輝きを問い求めていきたい」と宣言された。基本に沢木先生の唱えた「即物具象」の写生」を置き、故郷信濃に根差した豪放でかつ優しい句を私たちに見せて下さった。

俳句は眼前にあり

滝沢主宰が退かれた後、大坪景章先生が第二代主宰に。「風」の編集に関わって終刊を見届け、「万象」立ち上げに尽力されて六年、八十三歳での就任だった。沢木先生とは肝胆相照らす師弟の間柄、その傾倒ぶりが「俳句は眼前にあり」に結実した。大坪主宰の講演録や発表論文をまとめた本書で、編集の一員だった筆者も沢木先生の全体像を学ぶことが出来た。「師系の継承」を指針とする「万象」にとって大きな財産となった。

気宇壮大に

平成二十九年、第三代内海良太主宰が誕生。「万象」の理念は少しも変わらない」と話し「トップを中心に円陣を組んで『万象』を経営したい」と民主的な結社の在り方を提示さ

れた。その新しい感覚に新鮮な驚きを感じた。「俳句が魅力ある詩として成立するために『具象性』『新しさ』『自分の作品、作者の個性』が求められる。『気宇壮大』に」と爽やかに宣言。任期中に迎えた創刊二十周年はコロナ禍で大会中止を余儀なくされたが「良い機会と捉え、持続可能な新しい『万象』を皆で推し進めよう」との言葉に励まされた。

個性と新しみ

四代目の主宰として新しく「万象」の合言葉に「温故知新」を加えた。沢木・細見両先生理念と俳句の原点に今一度立ち返り「個性と新しみのある俳句」を目標に掲げた。

「個性」とは作者の生き方そのものであり、「新しみ」とは創造性の探求に尽きると思う。詩因を捉え、作句の態度・方法としての「即物具象」の写生」を基本に表現に結び付ける、この繰り返し「知新」なのではないか。「風」から通して学んできたことを糧に「万象」の仲間と修練に励み、俳句を楽しんで行きたい。

よろこびて馬の転がる今年藻 滝沢伊代次
うをのめに眼玉二つや沖縄忌 大坪景章
水飲んでさて獅子舞のうしろ脚 内海良太
潜き鵜の水輪を春の鴨滑る 江見悦子

俳句

5月号
予告

4月25日発売

巻頭作品50句『宮坂静生』

作品21句『坪内稔典・津川絵理子』

予価 1,300円(本体1,182円)⑩

特集

わび・さびに
学ぶこと

特別企画

没後20年記念鼎談

藤田湘子のメソッド
四ッ谷龍×小川輕舟×成田二子

追悼 高橋悦男

季寄せを兼ねた俳句手帖⑩

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

子規と私（四）

細見綾子

子規は常人のはかり知れない肉体条件の中で、かくも強い精神を持った肉体を、自分の肘で支えながら、終わりのころはモルヒネによって辛うじて仕事をした短い時間、それがなんと、改造社から出ています子規全集は十二巻、それから十二巻の俳句の分類、短い時間にあつて、そういう仕事をしているんです。

これは偉大というか驚異というか、ま、日本文化のひとつの山じゃないでしょうか。こういう子規のやってきたことを、もう一ぺん掘り出して、皆に知らせる必要があるんじゃないかと、私は思うんです。

ちよつと余談になりますけども、吉野秀雄さんという歌人がおりました。もう亡くなりましたが、その吉野秀雄という偉い人と新聞の選を一緒にしていたとき、その人がだんだん弱ってゆくのがよくわかりました。今回の俳句は皆だめだというようなことをしきりに書いていらつしやるから、これは吉野さんも大分弱つてゐるなと思ひ、一ぺんお見舞いに行きたいと言つたら、来てもいいという返事があつたものですから、私、鎌倉の吉野さんの家をお訪ねした。そうしたら、もう寝たつきりで、ただ上半身が生きてゐるような状態でした。

そのとき、吉野さんは、子規の『病牀六尺』『墨汁一滴』の初版本、それは秘蔵のものなんだそうですが、それを奥さんに取つてこさせて見せて下さつた。

私は文庫本を見ていたくらいで、初版なんてのは見たことがありません。和とじの和紙で大きな本です。だから、絵でも何でも、もうきれいに出版されているんです。鶏頭の絵だとか青梅の絵なんかが和紙に刷つてあつて、きょう、あなたが来てくださったからこれを見せたい、と言つてました。

吉野さんはひどい糖尿病で、もう絶え絶えになると、この本を出して見るんだと言つていました。子規のこの本を読むと、私の消えかかっている命の炎が、ちよつと燃えると言つてらして、私も恐る恐るその本を手につけて見たんですけれども、絵でも何でも、文庫本と違い、こんな本があつたら欲しいなと思ひました。そのうちしばらくして、吉野さんは亡くなつてしまつて、その本がどうなつたのかわかりませんけども、自分の命を奮い立たせるためにこの本を読む、見る、自分を奮い立たせるのに役立っている本なんて、そうたくさんはないだらうと思います。

子規は、そういう力を持つていたのです。

私は子規の写生に、もう一ぺん立ち返りたい。なぜなら、いま俳句は安易になつてゐると思うからです。俳句の人口は大変拡大したというけれども、やつぱり安易になつてゐますね。そういうことで、反省つていうとおかしいですけども、写生の復活つていうか、真の意味の俳句の復活。そういうことを言いたいと思います。自分にも、もちろん、それを言い聞かせているところです。

（次号につづく）

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ②

橋本 清

酒の名を 聖と負せし

古の 大きな聖の 言の宜しさ

(三・三三九)

「酒のことを聖人と呼んだ昔の偉大な聖人の、その言葉の何と素敵なことよ。」

太宰帥（大宰府の長官） 大伴旅人（665～731）の

「酒を読む歌十三首」の第二首。

作者の時代から遡ること約五百年、中国の三国時代、魏の太祖曹操（155～220）が禁酒令を施行していた頃、酒のことを「聖人」と呼んで、こっそり飲んでいる輩がいました。酔っ払うと、中毒ならぬ「中聖人」（聖人に中たつた）などとうそぶく者もいました。そんな不屈き者のことを、儒家が崇拝する堯・舜や孔子などの古代の聖人と同等か、それ以上に扱って戯れているのです。だいぶ聞こし召した後、酔って昂ぶった気分になかせて一気に詠んだという感じの歌です。

十三首の中では次などがよく取り上げられます。

験なき 物を思はずは

一坏の 濁れる酒を 飲むべくあるらし

(三三八)

なかなか 人とあらずは

酒壺に 成りにてしかも 酒に染みなむ

(三三三)

あな醜みにく 賢さかしらですと

酒飲まぬ 人をよく見ば 猿にかも似る

(三三四)

（注） 験なき……何の役にも立たない

なかなか人とあらずは……いつそのこと人間なんかでなくて成りにてしかも……なつてしまいたいものだ

賢しらをすと……自分は利口だと言わんばかりに

私はあまりいける口ではないので、こうした歌にはいま一つ共感できないところもあるのですが、表題歌だけは、その胸のすくような小気味よい声調に魅了されます。

Sakenonawo hijiritoohosei inisheno ohokijirino
kotonoyorosisa

ローマ字で表記した母音の部分を特に意識して口ずさんでみて下さい。古い詩歌を読む時、どうしても意味内容の読解が先行し、ともすると語音の響きに鈍感になってしまいがちですが、このiとoの連続が交互に出てくるところに一種の音楽を感じませんか。言っていることは実にたわいないことです。だから、意味内容をあまり穿鑿しなくてすむ。そのため語音の響きの面白さを純粹に感じとることができるわけです。言い換えれば、韻律や声調によって喚起された音楽的な快感がそのままこの歌の抒情になっているということです。

（以下、次回）



レジエントの靴下

宜野湾 宜野 顕

今年のテニスシーズンは南半球の全豪オープンから始まった。オーストラリアは1950～1970年代にかけてのテニス大国で、多くの名選手を輩出している。その中で小柄な体躯ながらプロスラムの歴代記録を保持しているのがローズウォールである。彼は万能型のプレーヤーで特にバックハンド・スライスの切れ味は芸術的であった。また彼はそのスライスを武器に世界と渡り合う息の長い選手でもあった。さて、その彼がテニスギアとして愛用していたのが厚手の羊毛靴下である。小軀ゆえに体力の消耗は激しく厚手の靴下で体を守る必要があったのだ。年

間を通して流行のソックスには目もくれなかった。

私は今、アウトドア用の厚手の靴下でシニアテニスを楽しんでいる。

靴下今昔

横浜 加藤和子

戦時中、女学生の私は黒の木綿の靴下を履いて通学していましたが、すぐ穴があくような品物でお作法のある日は踵の穴をソックスでごまかして授業を受けていました。

卒業後大手町の銀行本店に務め、絹の履き心地の良い靴下で通い始めると、すぐに物資不足で女子社員達の買い占めとなり、手に入らず苦労しました。

間もなく終戦となり、アメリカから薄手のストッキングが大量に入ってきたのですが、これが見た目の割にひっかかるすぐに伝線し縦にほどけて、直すのに一本いくらかという商売があった。若い女性たちの悩みの種でした。

古い事でそんな時代がいつまで続いたのか忘れましたが、今は靴下を修理することも無くなり、丈夫で安価な靴下が街にあふれていて、こんな話など

判らぬ人がほとんどとなりました。

大変な時代を生きた者の思い出です。

孫の靴下

芳賀 稲川清子

私の家には、男の子と女の子の中学生の孫がいます。孫達は畑に霜柱が立つような寒い日でも短い靴下にスラックスやスカートで自転車通学です。

学校では靴下の色や長さに規則があり、違反しないように守っています。寒さを我慢しているのか、若いから大丈夫なのか、見ている私の方が寒くなってしまう。風邪をひかぬか心配になります。最近になりやっとハイソックスが許可され私も安心しました。私たち年寄りには、冬の靴下は厚くて暖かいものが欲しくなります。「頭寒足熱」と言う言葉があるように、冷え易い足元は温めて健康には気をつけたいのです。今は暖房も昔とは違うので寒くないかもしれませんが、孫たちが元気に通学してくれることを願っております。

企業戦士

佐倉 鈴木美根子

「企業戦士」という言葉を調べてみると「日本において企業の利益のために粉骨砕身働くサラリーマン」とあります。

30年ほど前、夫はまさに企業戦士でほぼ単身赴任の生活でした。ある日帰宅した夫の靴下を見ると何と左右違う物を履いていたのです。当時靴下の色といえは黒か紺かグレーといった単色に横にワンポイントの柄があるくらいで、どれも似たようなものでした。それ故疲れていたのか急いでいたのか、よく見ずに手にとったものを履いたのか、夫に聞いても覚えていないと言う。その時私は、仕事が大変でさぞや疲れているのだらうと胸が痛みました。

今は靴下の色もカラフルで柄もいろいろあり、さすがに間違えることはありません。

野球とストッキング

大阪 入山繁幸

米国で始まった野球で初めて出来た

チームのユニフォームはニッカボッカに怪我防止用の白い靴下（ストッキング）姿だったという。その後色付きのカットストッキング（スターラップス）を重ね履きするようになったとか。

1990年代に大リーグの選手たちに踵までの長いズボンを着いてストッキングを見せない着こなしが流行すると、直ぐに日本のプロ野球選手も着用するようになった。高校野球はまだ認めてはいない。イチロー選手がああクラッシュクスタイルで大活躍すると、大リーグの中でもストッキング姿でプレーする選手が増えたという。

私はあのストッキング姿のユニフォームが好きだ。フットワークが警戒で若若しく、選手たちが躍動しているように見えるからだ。

室生犀星の靴下の詩

佐倉 立原千代子

私の6歳の孫は、来るや否やすぐ靴下を脱ぐ。私は着圧靴下を愛用している。私の友達は靴下を毛糸で編み、子供たちから喜ばれている。

ここに私が感銘を受けた室生犀星の

詩を紹介する。

靴下

毛糸にて編める靴下をものはかせ
好めるおもちゃをも入れ
あみがさ、わらじのたぐいをもおさめ
石をもてひつぎを打ち
かくて野に出てゆかしめぬ。
おのれ父たるゆえに
野辺の送りをすべきものにあらずと
われひとり留まり
庭などをながめあるほどに
耐えがたくなり
煙草を噛みしめて泣きけり。

『望春詩集』より

「万象ノオト」投稿募集

▽9月号「消しゴム」(5月末日締切)

▽10月号「ジャム」(6月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

巻頭作家（四月号）プロフィール



入河大河

（松山）

大ちゃん「巻頭」のニュースに句友のだれもが手を叩いて喜んだ。

昨年暮、「入河大河」という勢いのある立派な俳号に決めたと教えてもらったが、ここでは馴染みの「大」ちゃんと呼ばせて頂く。

昭和38年10月生。俳句を始めた切っ掛けは、黛まどか氏の『B面の夏』に出会ったことによる。彼は句にもまどか氏にも憧れて、東京に転居したのを機に知人の伝で、平成13年6月東船橋句会に入会した。東船橋句会の当時の指導者は、大坪景章先生。一年後漸く初投句して、即、2句組に。

大輪に小枝のたわむ椿かな
壁白き桜田門に柳揺れ

手作りのお弁当を持参し、時にはホームベーカーでパンを焼き、サンドイッチを少し誇らしげに広げている真面目な、少し物堅さも感じられる青年だった。長き足すらりと見せて椿かな

しなやかな枝に軽々春の雪
着る服の色を選びてラフランス

平成26年11月発行の東船橋合同句集『灯明台』（第三集）に収録されている作品。若しさが感じられる。その後、令和1年4月

冬鴉猫押し退けて餌つつく
枝を折り落してしまふ椿かな
殻破り芽吹き出したり風の音
令和3年1月

銀色にとがる細波秋の風
蜻蛉来る指先越えて枝の先
草むらの青さ引き立つ彼岸花
などの佳句もある中、仕事の多忙さもあってか伸び悩む時期もあった。千葉句会でも、いつも前の席を陣取り、内海良太先生の言葉を熱心に聞いていた。数年前に母上を亡くされ、愛媛県松

山市中島の空き家となっていた実家に、「家は自分が守る」と言って、一昨年の定年を機に戻った。実家は瀬戸内の小さな島にある由。

その後も、つばき句会へは「幹事の久保村さんに投句を送り、その横に添削の言葉を添えて送り返す」という方法で参加を続け、確かな写生の句が徐々に増えてきている。

昨年の第二十二回万象賞では、故里へ戻っての一年を纏め、江見主宰、内海名誉主宰に高点をいただき、好成績を収めた。

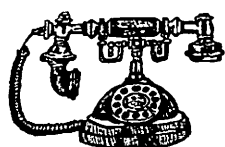
棧橋に燕の来たる青さかな
親戚のあれこれそれと盆用意
表札を我が名に代へる去年今年
毎月の投句は、自然に開まれ写生の効いた実感の句が増えてきて、ついに次の作品で巻頭となった。

アメ横の競り声浴ぶる師走かな
葉の色の朽ちてまだらや山眠る
冬芽の句あまた残して逝かれけり
どたばたと屋根に鴉や村時雨
この一報を、大坪景章、内海良太両先生に謹んでお伝えいたします。

大ちゃん、力を発揮する時です。楽しみにしています。
（内田郁代）

万象作品

江見悦子選



○は佳句に選ばれました。

掃き清め雪見障子を上げにけり 市川 奥澤よし江

ひと挿しの水仙にけふ始めり

枝先に広る日脚春めけり

○かぎりひの奥の細道師は風に 内海良太先生

鎌買ふや毘沙門天の達磨市 静岡 松永博子

○左義長の火の香纏うて句会かな

孕猫植込み出たり入つたり

吊るし雛表座敷を赤く染め

○小流れのひとつになりて春来る 柏 鹿毛満子

遠き目の崖観音や春の海

ゆうバック届く山間深雪晴

読経の唱和たかまる寒日和

文字褪する案内板や冬日向 那覇 辺野喜宝来

花石蒔の真只中に躓けり

首里城下照す寒九の大三角

○旧正の風や大漁旗が鳴る 掛川 鈴木美由紀

荒畑にひと声落す寒鴉

立春の光こぼるる飾り窓

無住寺の石仏纏ふ春の霜

○土を割りさ緑にほふ蒔のたう

大寒や波の逆巻く佐渡船路

新潟

榊原キヨ子

冬満月波のとりりと帰り船

黒雲の重り合ひて冬深む

○一湾に夜風の荒ぶ寒の明

○山眠るひととき音の消ゆる朝

東京

高野翠子

空青し点となりたる冬鴉

大晦日話残して逝きにけり

果てしなき空の青さや木守柿

寝静る団地除雪車遠ざかる

札幌

石田 睦

重ね着て肩に重たく夜の更くる

露天風呂屋根の水柱の長長と

漱石忌聖なる猫てふアビシニアン

滑りゆく右も左も樹氷林

日本酒の進む鱈ちり海の宿

冴返る人工衛星めぐる空

島崎 洋

なまはげの面から覗く優しき眼

○春近し牛舎に響くビバルディ

一撃の凍裂の音森走る

杉山和廣

老犬の睫毛に止る六花

○マンモスの地響きのごと吹雪きけり

裸木に止る鴉のビブラート

札幌

杉山鈴子

雪野原えぞりす走る尾も走る

雪道の縦一列に子等の声

明星^{みかほし}や霜の花置く窓ガラス

園田鶴子

対岸へ続く足跡氷結湖

鳥たちて粉雪散す雑木林

雪原の雪の窪みは澄んだ青

竹重富子

雪掻の明けゆく朝を愉めり

小さく咲く雪割草の小さき鉢

屋根越ゆる樹樹切絵めく冬夕焼

田邊政代

冬満月ライブ帰りの急ぎ足

黄水仙すつくと八十路のハイヒール

いつぱいの喰積余す二人きり

土門一平

日脚伸ぶ札幌ドームのコンサート

すべりつつ凍道戻る下校の子

薄氷のくづるる路地を急ぎ足

土門 一

湯豆腐の大鍋たぎる夕餉かな

晴天の眩しき日差し雪を掻く

家路へときしむ足音息白し

船橋明美

店先に豆がいつぱい節替り

漆黒の空を映せり冬の海

新庄 曾野部礼子

干ごみ寒九の水に戻したり

吊されて鼈甲色に凍大根

部屋の隅まばらに赤き実万両

山の宿窓一面の雪の華

仙台

富田洋子

国宝の庫裡にしだるる餅の花

神馬舎に残る緋の鞍春淡し

短日や母の煮付の味深き

新潟

齋藤 信

冬晴や工事現場の音澄める

癖文字の師の添削や星冴ゆる

読初は八十過ぎも人生論

何事も無く平穏な松七日

鳥追の唄の繋る佐渡の島

漱石の『こころ』を選ぶ読始

冬ざれや町の幟のはためいて

凍空やバス待つ列の硬きこと

六歳の孫に年玉もらひけり

足首に湯の花のせて初湯かな

盤上に初手ばかり指す三が日

救急車の排気白じら寒の闇

山田季聰

チューリップ水やりし子と丈くらべ

春泥のべつとり匂ふ山帰り

一円切手貼り足す葉書春隣

売切れの豆大福や日脚伸ぶ

風折れの桜の枝に冬芽かな

娘より届く手打の晦日そば

芳賀

稲川清子

柚風呂や幼子柚子を握りしめ

初日の出堤防に立つ三家族

ぼろぼろに小鳥ついばむ青菜かな

福豆に猫のじやれつく明るる朝

門前にやつと咲き初む福寿草

名草の芽青青畦に生え初むる

久久の友に香焚く寒椿

ジーパンの僧着ぶくれて筆買ひに

野水仙草を押し上げ芽を出せり

鹿沼

渡辺利子

空つ風小川の水の細くなり

マフラーのぬくさ優しさ子にもらふ

「風信帖」の臨書を終へて小豆粥

栃木

飯塚キミ

○春浅し処方されたるビタミンD

齒科医院の漆喰の藏梅あかし

年賀の子溢るるほどの花持ち来

佐野

木村君子

○ありし日のあの声間近春立てり

列長き厄除寺に年迎ふ

あちこちに白梅ひらく遊歩道

所沢

小橋川 和

喫茶店に集ふ年賀の仲間かな

子の近況受くる電話や春浅き

木村君子

朝まだき遠くに見ゆる雪の富士

早すぎる隣人の通夜春寒し

千葉

高田みや子

春疾風洗濯物を煽りたる

針供養母の使ひし布団針

光風や蹴球の音弾けたる

仲山さよ子

盆梅や診察室の声大き

白梅の瑞枝と蓄うすみどり

酒々井

小林あけみ

緑色の春セーターは店の奥

片づけの足裏に跳ぬる追儼豆

曲輪跡さくさく苔の霜柱

義本美智江

振舞の鯉こくの湯気寒明くる

餌啜へし鴨追ふ鴨や水しぶき

佐倉

新谷八郎

足揃へびよんと石段鴨の二羽

○ありし日の声耳奥に迎春花

毛糸編む小さき指の小刻みに

志木

汐見克彦

小流れのか細き音や露の臺

臘梅の香に迎へたる傘寿かな

有泉正夫

初夢に阿弥陀如来の出でませり

前掛をきりりと締めて初講座

陽を浴びてどこもころ梅ふむ

森山洋之助

寂しさのつのる筆跡初句会

下萌や避難区域の荒地にも

○大銀杏結うて大関初相撲

杉田富美代

「三密」も死語となりけり流行風邪

光伸び水面に写る初日の出

亡き友に賜る椿に初の花

新座

多田英治

ぼたぼたと佗助落ちてしづかなり

入浴介助受くる至福や寒の昼

故郷の香のたつぷりと餅を焼く

鈴木隆久

波の花荒れに荒れたる能登の海

松過やひとりの時間戻りたる

リビングに珈琲香る四日かな

佗助や盆に干菓子佐倉の三つ四つ

初夢を見しが忘るるうつつかな

雨降りて白梅うるむ垣根かな

石を踏み水を啄む春の鳥

日溜りの春の葉淡し策の中

名月や窓辺によせて車椅子

米田敏子

○生初や鋏取り出す帛紗より

母想ふ柚子の香りの鯉大根

わが試歩はお里沢市あたたかし

眠るため英語講座や目借り時

春塵や千葉名物と納得し

初大師の曇天開くちんどん屋

香煙を頭に腰に初大師

ごろごろと二十日正月夜の雷

ふるさとの喇叭水仙濃き黄色

冬林檎煮詰むるとろ火夜の厨

鈴木美根子

佐倉

鈴木美根子

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

佐倉

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

立原千代子

干大根日毎日向の匂ひかな

友達と臘梅の香を分けにけり

朝の雨幹黒黒と枇杷の花

臘梅の狭庭の光集めたり

八階の空に一粒鬼は外

春耕や土にふかふか日を混ずる

料峭やホットコーヒーまで千歩

薬や今日も散歩の足を止め

苔庭を明るくしたる落椿

思ひ出を繋ぐ写真や返り花

かさこそと落葉ささやく小径かな

対岸の里の空染め初明り

早春の飾らぬ文字の色紙受く

○春隣ぢいちゃん作の紙相撲

春を待つ良太脚本家族劇

日溜りに楽しく咲ける紅の梅

里出身白鷹山の初相撲

どんと焼き天国の父見えますか

冬風の空鉛色能登の浜

一山は臘梅の香と鳥の声

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

菊岡緋路

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

松戸

毛呂山は吟行日和笹子鳴く

ポケットのぬくし鯛焼転がす手

東京

齊藤孝夫

まづ取り出せる大鍋の煮大根

袖風呂や両手で拭ふ顔の皺

初みくじ開く指先がさつきて

足癒えてまづ美容院冬うらら

寒卵共通一次を明日にして

黒鶴を見に初旅の新幹線

年明くる百年を経し門司駅舎

春の日を追ひつつひとひ読書かな

景品の軽き包みや種袋

ふはふはの捻りドーナツ春の雪

水色の袴力士豆撒けり

相寄らず床に転る寒卵

一滴の雫を溜めて寒椿

臘梅の空の青さに俯けり

臘梅の間の空の青さかな

鐘一打ごとの一礼初帝釈

目が合うて首傾ぐるや初鴉

○山茶花の垣根を曲るランドセル

高野翠子

鶴田智美

中澤桃子

橋本紀代子

長谷川信也

長谷川はるみ

初場所や力士の額に赤き痣

ぶつ切りの鶏肉煮込むちゃんこ鍋

ペランダに匂ふ臘梅雲白き

琴の音の聞えて来り春隣

早春の明るき日差し総身に

恩師逝く少しぬくとき冬の日に

病む猫がぶるぶる立てる冬日向

痙攣の猫ぎゆつと抱く節替り

冬かもめパン屑めがけ滑空す

枯芝に軍手片方忘れられ

三色のミニシクラメン鉢に植ゑ

風なくば冬日もぬくし青き空

子規庵の見果てぬ夢や冬ざる

夕間暮れさやぐ木立に冬の雨

焼菓子の砂糖たつぷり冬うらら

寒声のソプラノ届く採点室

○受験子の重きリュックに日のほひ

小鳥鳴き赤き実たわわ冬日和

山茶花や酒蔵の坂のぼり来て

如月の日のこぼれたる朝の窓

東京

馬場美智子

平子甲奈

前川昇

宮崎正義

荒井仁

三鷹 南場雅子

冬ざるる指のささくれ次次と

府中

竹村晃子

冬薔薇の棘あまたあり競馬場

人氣なき里山の畦母子草

内藤恵子先生追悼

横浜

柴田雅春

日だまりや一日の四温来るらし

行く秋や恩師のことば残りたる

初蝶や兄の訃報を懷に

日野

松原悦子

青麦や福耳の吾子就職し

風やさし金木犀の盛りなる

長野高朋

魯山人の写しの碗や鯛大根

枝先に残る命や冬紅葉

喧騒にバラード流る暮の街

青梅

横井一美

冬枯の狭庭に白き猫来る

息白く別れの握手クラス会

森桂子

ひとまづは静かに過ぎぬ三が日

老いてなほ迎ふる春や遠汽笛

癖字なる母のレシピや年用意

横浜

大駒泰子

組重の鶴の模様を合せけり

弟の二七日かな月冴ゆる

豊美佐子

初詣長蛇の列の最後尾

ボール追ひ木枯一号つき進む

縁側の日差しこよなき二月かな

新年の午後はウインナワルツ聴く

川崎

桜の芽園児集ひて砂遊び

かじかんで虫めがねに読む小さき字

川崎

横山ユキ子

紅梅の空に流るるちぎれ雲

息吸つて吐いてリハビリ寒椿

寝室の窓より拝む初日の出

薄氷の水辺はなるる音したり

茅ヶ崎

久保田富士子

初場所や江戸前芸妓の艶やかさ

猫なめて薄氷鉢に消えにけり

寒の水並んで飲める雀どち

紅椿雀の弾むトタン屋根

○寒満月主亡き庭照したる

春寒し遠列車聞く夢現

天神の鵲尾輝きて梅三分

坂本具子

元旦やただだ無事を祈りける

伊勢原

鷹取瑞子

独り居や節振舞もそのままに

伊勢原

山本カツ子

玄関に添書のある春キャベツ

静岡

杉山千鶴子

兄弟で取り合ひ食べし節料理

伊勢原

山本カツ子

針供養母の手縫ひの江戸小紋

福達磨夢へ切り火の響きかな

伊勢原

山本カツ子

露味噌の香りに引かれ朝の市

菜園の雨待つ土や霜の朝

伊勢原

山本カツ子

登呂の田の水口青む春隣

杉山巳代

寒日和寢息を立つる日向猫

松田

古谷悠紀子

出迎への臘梅香る茶室かな

初詣この地に馴染み経を受く

松田

古谷悠紀子

産土の鈴の音からき二日かな

固き殻カカンと打てり寒卵

松田

古谷悠紀子

○初場所のがつんと響く巴戦

高井明子

目葉のぼとりと冷た寒明くる

静岡

飯田優子

空広く大富士纏ふ寒夕焼

冬薔薇触るるや香り連れ帰り

静岡

飯田優子

梅の香やうぐひす笛のびゆるびゆるり

高橋一夫

登呂の泥コートの裾へ飛び付けり

静岡

飯田優子

臘梅の香のほのかなり日は山に

高橋一夫

○餅間^{もちあわい}昼はむすびとお新香

静岡

飯田優子

堂開くる冬日眩しき地藏尊

高橋一夫

ひとり夜の風呂長長と小正月

静岡

飯田優子

貨車の音とどく小路や寒重

田中秀幸

着水の波を畳めり百合鷗

静岡

飯田優子

せせらぎに寒芹の青揺れてをり

田中秀幸

谷朧煙突高き蒸留所

静岡

飯田優子

裸木の竜の爪めく根方かな

田中秀幸

富士を背に駿河の海や初明り

静岡

飯田優子

外厠傍に零るる実千両

田中秀幸

初景色藁の大蛇は妻の干支

静岡

飯田優子

ありがたうの言葉はつきりお年玉

田中秀幸

札の辻風くる方に寒椿

静岡

飯田優子

日の差して葉牡丹の渦緩びたる

田中秀幸

万歩計机に置かれはや三日

静岡

飯田優子

廃校に正月の風高高と

田中秀幸

底冷えや靴音絶ゆる地下通路

静岡

飯田優子

ねつとりと冬至南瓜の煮上りぬ

田中秀幸

湯豆腐や土鍋に縦の罅はしる

静岡

飯田優子

看護師の笑顔やさしき年始

田中秀幸

蒟蒻に疊針刺し針供養

子ら駆くる登呂の遺跡野春近し

静岡

中澤祐一

権禰宜の木杵の響き初松籟

冬落暉カーテン越しの一日なり

銈介居の玻璃戸の向かう冬木の芽

庭の梅一輪ひらき君は逝く

○薄氷に指ふれをれば網走る

川風に氣儘に揺るる猫柳

茎立や猫の眠れる捨て畑

トンネルを抜けて里山芽吹きけり

冬青空切通し抜け靈山へ

煽られつ空へ空へとどんとの火

大寒やびたと鷗の着水し

将門の塚に手合す寒日和

雨水かな珈琲館の白熱灯

山茶花や杖の音する煉瓦道

待合に埴輪の視線春近し

焼津

小梁洋子

開かんと力尽きたり寒薔薇

夕汽笛寒の空気を押し広ぐ

酒樽に束ねて活くる冬至梅

川崎

鈴木裕一

○野仏を抱へ込みたる藪柑子

冬椿穂先にからめ古箒

鯽起し能登の港の活氣づく

冬ざれや検査待つ間を持てあまし

年酒や一夜限りの大家族

初釜や平棗なる輪島塗

大雪をながむる窓に子が遊ぶ

岩海苔を採ってくれたる能登の人

被災地へ揺す睦月のペンライト

黄灯の除雪車闇に音たてて

脚晒すランドセルの子雪の道

一息に肺を満して寒昂

○朝市の掛け声尖る頬被

豆まきや黒留袖の勢揃ひ

風を抱き葉牡丹の渦しまりけり

春近し貝の微塵の光る浜

立春や紅茶のレモン透き通る

奥卯辰雨にうたるる冬桜

初雪や玄関先に筵敷き

星一つ見えぬ夜空や除夜の鐘

金沢

上野富貴子

北野陽子

新出祐子

菅原雅子

田上ナツ子

廣田宏美

二ン月の雪に埋もれ加賀の里
別れ雪墨絵となれる野面積

金沢

松田好子

強弱は春のあしおと堰に来て
をさな子の眼いきいきお年玉

宮崎恵美

丸型の睦月の絵馬や風の音
きさらぎや遠路の友のベレー帽

かほく

能任康子

片付かぬ仕事の山や年迫る

雪吊の形をなせり雨の中

鳴き交し雨も辞せじと寒鴉

白山

朝倉みゆき

雨音に心の和む寒の明け

胸元に母の香微か春シヨール

鶴尾正江

春場所や綱打つ音のトントントン

蘆の芽のさざ波溜めて水底に

珠洲

井端久子

冬の虹車窓に映ゆる美事さよ

池の面に逆さ雪吊鳶舞ふ

敦賀

川口和代

連峰の裾水平に漁始

初針のボタン着衣のまま付けて

犀川へ遍きひかり四温かな

○若水を掬へば稚へ玉しづく

冬

夜遺影ほほ笑む句座の日

人日の青空抜くるテニス球

初時雨あとの西空茜ぐも

徳島

山本晴美

年賀状今年最後と書いてあり

幼子の作る小さき雪だるま

星座の名言ひ当てながら除夜詣

山本瑤子

母の忌や庭の山茶花散りやまず

魚市の上空回る冬かもめ

花替へて墓前に満す寒の水

小松島

田上幸子

○寒稽古皆勤賞に竹刀竹

禪寺の薨を歩く寒鴉

テンポ良き鳶の声や初御空

松山

入河大河

福引や溜息に人入れ替る

門松を背にして孫を出迎ふる

金婚式の写真笑へり冬桜

福岡

園田清子

たんぽぽの黄の一輪や土手の道

燕漬ける瑞瑞しい葉もどつさりと

○元旦の御空へ願ふ核廃絶

鶴田輝代

今年又彩り添ふる俳句かな

光浴び枝重さうに蜜柑熟れ

冬うらら騙し絵巡るリヨンかな

太宰府

美山留唯

女神駆くるテロ―広場や日短

冬空へ威風堂堂ビッグ・ベン

ゆきひらの粥ふつふつと寒卵

那珂川

高山ひさ子

○福耳の区長の火入れどんと燃ゆ

福岡へ転勤決り春立ちぬ

うららかやパン屋のれん揺れるたる

門川

請関ゆかり

焼き立てのパンの香りや春の雲

雀の子猫に追はれて枝の先

霧島を雲間に眺む雪見風呂

国富

山口孝治

雪雲の山襷深く沈みをり

去年今年足跡続く獣道

絵手紙に蜜柑の染みやみかんの絵

那珂

稲嶺有晃

○置時計チッチ寒夜の再起動

初夢はウルトラマンの見る地球

立春の朝の茶柱いただきます

春の風邪去年と同じ処方箋

指組んで大きく伸びて春の風

海風を捉へ城址の寒鴉

海を来て日照雨は石路の黄を打てり

奉神門春の宴へ開きけり

稲嶺有晃

大城末治

バス停に急ぐ喪服や島桜

沖繩

高嶺容道

春光や真珠道てふ石畳

○春風に葉音こもれる大樹かな

隣垣へ伸びてかづらの枯れつくす

玉城玉常

寒晴や壁一枚の蔓を削ぐ

冬の鳥浜の四阿朽ち崩れ

宜野湾

宜野 顕

波消しに坐す少年や冬落暉

少年に塾の灯や寒の雨

春風や石獅子祀る里の辻

ベリ

森尾 舞

傾ぎをる海辺の松や冬の風

うつくしや苔むす枝の霜雫

ぬくみまだ残る布団に猫丸む

〈お詫び〉

4月号P9下の前田貴美子様の句に誤りがありました。
深くお詫びして訂正いたします。

〈誤〉 除夜の濁に物捨てし指緩びたり

〈正〉 除夜の湯に物捨てし指緩びたり

4月号P49下にお名前の誤りがありました。
深くお詫びして訂正いたします。

〈誤〉 伊端久子

〈正〉 井端久子

万象作品の佳句

江見悦子

かぎろひの奥の細道師は風に 市川 奥澤よし江

内海良太名譽主宰への弔句。古典に造詣の深かった良太先生の語る芭蕉や「奥の細道」は、ウィットに富んで無類に面白かった。奥澤さんの所屬する成田句会でも、そんな話を皆で楽しんだに違いない。この句、「かぎろひの」が良い。「片雲の風に誘われて」、いえ「風」になって、「かぎろひ」の光と影の中に消えてゆく師の姿が、はかなく哀しい。

左義長の火の香繼うて句会かな 静岡 松永博子

「左義長」は正月の火祭の行事。どんど、とんど等、様様と呼ばれる。吟行で左義長に出掛けたのだろう。終わって、さあ句会が始まる。と、部屋中にどんどの火の香りが漂っている。自分だけではなく、皆のオーバーにしみついた香りだ。まさに全身で左義長を味わったこの日、実感に満ちた、きつと良い句が沢山披露されたに違いない。俳味のある句。

小流れのひとつになりて春来る 柏 鹿毛満子

小さな流れが何本も通っていた湿原にしばらくぶりにやって来ると、雪解けの影響か一本の太い流れとなって原を貫いている。冷たさの残る清らかな水の流れだ。そこに春の訪れを感じた作者。万物も流れもいきいきと動き始める季節を「ひとつになりて」と捉えたところが発見。

旧正の風や大漁旗が鳴る 那覇 辺野喜宝来

季語は「旧正」で春。旧暦の正月の略で、現行の新暦の正月にひと月遅れ、立春前後に巡って来る。現在では大方すたれてしまったが、地方によって今も行事を守っているところもあるようだ。「沖繩歳時記」によると、「旧正」の頃に漁業の盛んな糸満では旧正を守っているところある。風に大漁旗が「鳴る」と捉えたところに臨場感が生まれた。作者も又、新しい年を迎えた喜びと昂りを感じている。

土を割りさ緑にほふ落のたう 掛川 鈴木美由紀
早春の落の莖の瑞瑞しさを詠んだ素直な写生句。早春、黒土を割ってさ緑の落の莖が地上に点点と現れる。摘んでみると青臭い匂いが新鮮だ。的確な描写が良い。

一湾に夜風の荒ぶ寒の明 新潟 榎原キヨ子

「一湾」とは、新潟の信濃川、或いは阿賀野川が日本海に出るところの湾だろうか、いずれにしても冬の日本海の荒荒しさは寒が明けても鎮まることがない。作者は眠れぬまま風の吹きすさぶ音を聞き、遅い春の訪れを想像している。

山眠るひととき音の消ゆる朝 東京 高野翠子

山を近くにしたら暮しなのか、朝のひとつとき作者は音のない時間を味わっている。窓に見える雑木山は落葉に覆われ、ふつからとうずくまっている。これから寒さが続き、そのあとには芽吹きが春がやって来る。静寂の中に味わう気持ちは穏やかで満ち足りている。

マンモスの地響きのごと吹雪きけり 札幌 杉山和廣

杉山さんは初めての投句、最近奥様と一緒に万象に入会された。この句、北海道の吹雪の様を「マンモスの地響きのごと」と堂堂と喻えた。マンモスとは異なるが、筆者は野尻湖博物館でナウマンゾウの復元模型を見て、その巨大さに驚いたことがある。マンモスとは生息地も時代も違うが、「マンモスの地響き」に巨大なゾウが雪原を踏む有様を想像した。北海道にふさわしい氣宇壮大な句。

ありし日のあの声聞近春立てり 新座 多田英治

内海良太名誉主宰がお元氣だった頃の「あの声」を聞近に聞いた多田さん。印刷所有文社社長の多田さんは、良太先生と「風」以来の盟友、「万象」誌を創刊号から令和4年4月号まで我が子のように愛し、毎号編集と一緒に作り上げてくれた。良太先生の「青嶺」も多田さんの手による句集である。2月4日のご葬儀には、車椅子でご家族と一緒に別れに来て下さった。万感の思いに満ちた句。

大銀杏結うて大関初相撲 佐倉 杉田富美代

「初相撲」が新年の季語。今年の初相撲で一番の注目力士は、初土俵からおよそ1年半、わずか9場所で大関に昇進した大の里。2回の優勝を決めた昨年までは髪が伸びず、優勝賜杯をちょんまげ姿で受け取っていたが、今年の初相撲では立派に大銀杏を結った姿を披露した。出身が石川県津幡市であって、能登を、また全国を元氣づけてくれた。

餅間昼はむすびとお新香 静岡 飯田優子

「餅間」という新年の季語を始めて見た。「もちあい、もち

あわい」と読む。1月7日の七種過ぎから、15日の小正月の前までの期間をいい、年末に搗いた餅が七種まではあるが、小正月の餅を搗くまでには乏しくなる、という意味。そんな時期の昼食、そろそろ餅に飽きて来たのか、むすびとお新香で済ませる作者。餅間、と言う季語が生きた。

朝市の掛け声尖る頬被 金沢 菅原雅子

能登の朝市通りの光景だろうか。寒さの中、早朝から始まる朝市を詠んだ。「頬被」が冬の季語。「掛け声」とあるが「売り声」ではないかと思う。何軒も並んだ小店から、物色中の客に様様に「なじらね」（どうですか？）と声が掛かる。その声が尖って聞こえたのである。寒気きびしい真冬の空気の中でので矢りである。今後の能登の朝市の復興を祈ります。

若水を掬へば稚へ玉しづく 敦賀 川口和代

元日の朝まず汲む水が「若水」、新年の季語である。新しい水を飲むことで命を更新する願いが籠もる。作者は神社に詣で、真新しい柄杓で若水を汲んでいる。一瞬、胸元に抱いた赤子に雫がかかった。産着の上をころころと転がっていく雫を「玉しづく」と美しく詠んだ。接頭語「玉」は、名詞につく美称である。「稚」の健やかな成長を願っている作者の思いが籠もる句。

*基本的な事です、投句用紙に句を書き入れる前に、客観的な目で自分の句を見直して下さい。季語、漢字、送り仮名などの表記が正しいかどうか、チェックが不可欠です。また投句控えは大切です。

新中央句会報 (2月例会)

令和7年2月23日(日) 東京文化会館

(出席25名)

江見 悦子 主宰選

寒鯉の孤独の重き水底に	下嶽孝一
手土産は東秩父の寒卵	南雲秀子
をんどの声の絶えたる寒さかな	中村千久
師の墓誌に絆の一字暖かし	長谷川信也
たこ焼の匂ひはみ出す春の昼	大久保進
のどけしや欠伸のような泥の泡	吉中愛子
句座の締め温顔のなき余寒かな	安藤美酒々
サクソフォンはづして仕舞ふ夜の梅	一由久美子
枝垂梅仰げばぐらり角隠	長谷川信也
水ぐるまざんざと廻る雨水かな	大久保進
冴返る坂にヒールの固き音	内田郁代
雪解の光あつめてゐる梢	一由久美子
④一枚を剥せば春へカレンダー	砂地宏子

④一枚を剥せば春へカレンダー 砂地宏子

様様な思いを残した1月が終わる。立春のやって来る2月となれば、新たな1頁が始まることになる。「剥せば春へ」の措辞に感心した。「剥せば」の具体性と、「春へ」から伝わる心の動き、この二つの組合せが一句を成り立たせた。作者はカレンダーというモノに自身を投影させている。

手土産は東秩父の寒卵 南雲秀子

東秩父は埼玉県唯一の村、古くから「和紙の里」として知られ、「細川紙」の産地である。槻川の最上流域で、外秩父山地などの山山に囲まれている。「寒卵」は寒中に鶏が産んだ卵のこと、他の季節と比べて殻も固く滋養に富む。この句、手土産に頂いたものか、或いは作者が届けたものか。どちらにしろ、大きくはないが黄身の盛り上った栄養たつぶりの寒卵だ。「東秩父の」が眼目。

師の墓誌に絆の一字暖かし 長谷川信也

「栄師」と前書がある。4年前に93歳で亡くなられた谷田部栄さんのこと。ご葬儀には筆者も参列したがご霊前に「絆」と筆太で書かれた色紙があった。それが墓誌に刻まれたのだろう。栄さんの人柄そのままの季語「暖かし」に、師への思いの深さを感じる。

句座の締め温顔のなき余寒かな 安藤美酒々

「温顔」とは内海良太名誉主宰のこと。掲句の「句座」はこの「新中央句会」と取った。いつもの句座を締めくくるのは、まさに名誉主宰だった。「温顔」で語られる選評は。時に良太節となり私たちを楽しませた。「余寒」の季語に作者の大きな喪失感を感じる。上五から下五までひと息に通す「かな止め」の句なので、上五は「句座締め」としたい。

中村 千久 選

玄関にあらせいとうの香り活け	奥 太雅
ものの芽のひそとふくらむ朝まだき	砂地 宏子
緑児のころり反転風ひかる	三屋 英俊
師の墓誌に絆の一字暖かし	長谷川 信也
それとなく行方見てゐる石鹼玉	大久保 進
戦災誌の東や三月十日来る	江見 悦子
のどけしや欠伸のやうな泥の泡	吉中 愛子
耕の風に土の香ひるがへり	三屋 英俊
居眠りの羅漢も居りて暖かし	星野 信子
茂吉忌や触れて冷たき葎椿	大久保 進
沼入りの川に釣り人榛の花	奥 太雅

笹鳴や屋敷に小川走らせて 吉中 愛子

④ 一枚を剥せば春へカレンダー 砂地 宏子

⑤ 一枚を剥せば春へカレンダー 砂地 宏子

ひと月が終わるごとに破いてゆくカレンダーには、それぞれの季節にふさわしい絵や写真が印刷されている。掲句はその一枚を剥がしたときに現れた明るい春のイメージを喜んでいる。「剥せば春へ」と詠んだ作者は、カレンダーの中に吸い込まれていくようだ。

師の墓誌に絆の一字暖かし 長谷川 信也

掲句にある「師」は、中央句会の常連で、先年亡くられた矢田部栄さんのこと。栄さんはその名人芸でしばしば句会の点数を攫っていたことが懐かしい。墓石や墓誌に、故人の好んだ文字が刻まれたりする。鎌倉円覚寺の小津安二郎の墓には「無」とあるように。信也さんの師は、「絆」を基本に句会を率いていたのである。師を思う作者の心根も、また暖かい。

沼入りの川に釣り人榛の花 奥 太雅

静かな写生の一句である。人氣もない沼に流れ込んでゆく川に、黙々と釣糸を垂れている人物が点景として詠まれている。

る。水辺を好む榛の木の森が広がっているのである。「榛の花」が初春の季語。

内田 郁代 選

木の芽晴言葉溢るる一歳半	下嶽孝一
良太逝き「万象」の杜訝返る	柳澤宗正
それとなく行方見てゐる石鯨玉	大久保進
日脚伸ぶ猿若町の小屋の跡	沢辺たけし
戦災誌の束や三月十日来る	江見悦子
強東風や湖面の光すべりたる	田中道江
草の芽は大地の息吹利根川光る	三屋英俊
句座の締温顔のなき余寒かな	安藤美酒々
鳩羽色残る日没春深し	田中道江
石も呻け我が泣く声は虎落笛	三屋英俊
居眠りの羅漢も居りて暖かし	星野信子
雪解の光あつめてゐる梢	一由久美子
④ 耕の風に土の香ひるがへり	三屋英俊

④ 耕の風に土の香ひるがへり 三屋 英俊
「耕し」は種蒔や植付けの準備、春を待つ明るい季語。確

かに土には匂いがある。それを風が吹き飛ばすのではなく、ひるがえらせた。暖かい日を想像する。「ひるがえる」に状況を託した上手い句。

それとなく行方見てゐる石鯨玉 大久保 進

しゃぼん玉に気づくと、大方の人は行方を追っているのではないか？ そんな情景をさっと切り取った軽やかで写生の効いた句。ただ、漢字ではなくかな文字で「しゃぼん玉」とすると軽みも出ていいように思います。

強東風や湖面の光すべりたる 田中道江

春の夕暮れはいろいろな情景を見せてくれる。それを「鳩羽色」と捉えた感覚的な句。鳩は雉鳩だろう。もしかしたら、夕焼け時の色？ 想像が膨らんでくる。「春深し」ときっちり抑えてあるのもいい。

今後の新中央句会の予定

▽5月25日(日) 東京文化会館 小会議室	13時より
▽6月22日(日) 東京文化会館 小会議室	13時より

ルビーの小函 (5月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- | | |
|----------------------|---------------------|
| 6 霾(つちふる) | 27 著し(しるし) |
| 7 漣痕(れんこん) | 鉄舟(てっしゅう) * 幕臣・山岡鉄舟 |
| 8 栗鼠(りす) | 櫛(ほだ) |
| 魁(さきがけ) | 分葱(わけぎ) |
| 接骨木の花(にわたこのはな) | 28 越(こし) |
| 9 甘蔗の花(きびのはな) | 嬰兒(みどりご) |
| 12 鯀群来(にしんくき) | 擡(もたげて) |
| 13 緑(えにし) | 29 獺(おそ) |
| 14 節(たかし) * 小説家・長塚 節 | 52 梧桐(あおぎり) |
| 15 秀(ほ) | 53 嬰鑠(かくしゃく) |
| 16 言祝ぎ(ことほぎ) | 64 六花(むつのはな) |
| 17 水垢離(みずごり) | 65 鼈甲色(べっこういろ) |
| 上総(かずさ) | 67 生初(いけぞめ) |
| 18 三十三才(みそさざい) | 藥(ひこばえ) |
| 19 方相氏(ほうそうし) | 68 額(ぬか) |
| 21 家苞(いえづと) | 69 鴟尾(しび) |
| 水分(みくまり) | 夢現(ゆめうつ) |
| 標(しるべ) | 70 産土(うぶすな) |
| 22 野点(のだて) | 71 権禰宜(ごんねぎ) |
| 23 羚羊(かもしか) | 莖立(くくたち) |
| 出合ひ頭(であいがしら) | 平棗(ひらなつめ) |
| 窟(いわや) | 72 野面積(のづらづみ) |
| 金縷梅の花(まんさくのはな) | 稚(やや) |
| 24 腸(はらわた) | 73 日照雨(そばえ) |
| 楔(くさび) | 80 続(つづ) |
| 雲梯(うんてい) | 幫間(ほうかん) |
| 羈場(せりば) | 子子(ほうふら) |
| 信楽(しがらき) | 新北風(ミーニシ) |
| 25 水面鏡(ひもかがみ) | 身に入む(みにしむ) |

北 南 西 東

消 息 等

故内海良太名誉主宰、江見悦子主宰の句

「くちら」 3月号に

雲海にひるがつて来し初明り 良太

足弱の夫送り出す冬たんば 悦子

「森」 3月号に

雪吊を統ぶるや鷺の天辺に 悦子

「初蝶」 3月号に

結間の締めはかつばれ秋深し 悦子

「たかな」 2月号に

毬栗や土蔵に小さき明り取り 悦子

第46回琉球俳壇賞を宮城勉さんが受賞

俳誌「万象」同人。万象俳句賞受賞等な

ど俳句の実力が評価されている。昨年の投句作品から次の5句を紹介する。

幽冥の遙かへ流れ冬銀河

子子の息を重みに沈みけり

沖雲に懈怠の兆し夏の果

新北風や猫に収まる猫の影

身に入むや天に触れむと慰霊塔

宮城さんの俳句は、物事の本質を的確に

描写し、豊かな語彙と表現力で独創的な句

を詠み、その実力が評価され俳壇賞に推薦

された。

(琉球新報)

復刊 新沖縄文学 96号に前田貴美子さんの句

本誌は沖縄タイムス社より1966年に

発行され、沖縄の論壇をリードした雑誌で、

1993年に95号にて休刊。今回、戦後80

年の沖縄のいまを集めて「新沖縄文学」96号

を復刊。第44回俳人協会新人賞受賞の安里

琉太さんと前田貴美子さんとの競作です。

祝祭と血を唾棄するための習作

安里 琉太

ナブキンに拭う銀蠅感謝祭

枇杷散るや家霊寝そべる青畳

雨脚がまつ暗を来る黄水仙

寒鯉の血の衰へてすゝむなり

手拍子が蛸蛸の国ちゆう響く晴天

ある浮游

前田貴美子

湯風は午後のかげりを抱卵季

浮かみたる微熱の眠り大千潟

ページ折る白てふてふの昼深く

詩を書いて青年はしろつめ草に

うりずんのルーベ睡たき翅の息

入選

令和7年俳人協会静岡県支部新年俳句大会

熱燭や人の齢は背中より 神田美穂子
日がみがき風がみがくや吊し柿 神田美穂子

黎明の雲うすももに春立てり 神田美穂子

「西東三鬼賞」 佳作

かはほりや黒板色の夜が来る 萩野加壽子

日盛りやポスト律儀に直立す 萩野加壽子

残暑なほ電柱も木も立ちんばう 神田美穂子

第18回「万象」千葉県支部俳句大会ご案内

日時 5月8日(木) 13時より

吟行地 松戸市内(戸定邸・松戸神社他)

会場 松戸市民会館2階 202号室

アクセス JR常磐線・新京成電鉄松戸駅

(東口)より松戸市民会館へ

徒歩7分、戸定邸12分

参加費 千円 投句数 4句

問い合わせ先 古川京子・田中道江

第10回いわき海の俳句全国大会

開催日 8月24日当日締切12時30分

当日句 1組(2句)無料

2組目から五百円

作品募集 事前投句 1組(2句)千円

応募期間 4月1日～5月31日

詳しくはホームページ参照

(報・編集部)

939-0364

射水市南太閤山13
|
24

万象作品投句係行

110円切手を
貼ってください

氏 名	住 所

〈通信欄〉

編集後記

▽内海名督主宰の悲報をお知らせしたのがついこの間のことでしたが、後を追うように曽根満同人会会長の計報がもたらされてやり切れない思いに浸ることになってしまいました。

浅場英彦先生の衣鉢を継いで静岡に即物具象の写生の風を吹かせ、俳句の裾野を広げること尽力されたことを心に留めたいと思います。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(千久)

▽先日、勧められて終身タイプの医療保険に加入した。既に加入済みの生命保険に付随した医療特約は80歳迄で、その後の保証がない。周りを見ていると、入院や手術のリスクが高まるのはむしろ80歳を越えてからである。超高齢化社会に十分に備えて、結果的には保険のお世話にならずに済めば、一番の幸せではなからうか。

(規子)

▽暖かな日差しに誘われ3月1日市内の浮島自然公園に出かけ、天道虫や

蟻と出会った。沼に行くと放課後児童クラブの子供たちが、指導者と来ていて、盛んにタモで沼を探って、目高やカダヤシ、蝦、お玉杓子を見つけ大喜びしていた。早咲きの桜がほころび始めて春を実感した。

(美穂子)

▽井伏鱒二の詩を読み「生きること」に鋭くかわる詩が、おかしさとまるで無縁であつていいのだろうか？ 上等の笑いを求めて詩集を開くことがあつてもいい筈だ」と茨木のり子は思ひ至り、「人名詩集」を上梓する。さて、その後は……「茨木のり子集 言の葉2」(ちくま文庫)の「井伏鱒二の詩」をお読みください。

(宏子)

▽レストランなどのコース料理の定番コーストビーフを作ってみた。調理時間は約1時間、初回にしては上出来。コーストビーフは難しい料理？ と思っていたが、思い込みだったようだ。調理は簡単、保存ができ、味が落ちない、牛肉も赤味なので値段も経済的。ただ、ソースは市販のものを使った。薄紅のコーストビーフ春兆す(清晴)

会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万象 五月号

第二十四巻 第二号
通巻 第二七八号

令和七年五月一日 発行

主宰 江見悦子
発行人 江見悦子
編集人 中村千久

〒168-00072

東京都杉並区高井戸東一三二一六 603

万象発行所

☎〇三六三二四一五七九六

第二十三回「万象俳句賞」作品募集

万象俳句賞は毎年一回広く作品を募り優秀作を表彰、「万象」俳句の向上・発展に資するものです。多数の応募を期待いたします。

作品

一人20句 未発表新作に限る

原稿用紙など一枚に縦書きとし、一通（コピー可）提出

原稿の冒頭に題名を、末尾に住所・姓号を明記

封筒に「万象俳句賞応募」と朱書のこと

メールでの応募の場合は、応募原稿と必要事項を添付してお送りください

選者

江見 悦子 小林 愛子 中村 千久 福島せいぎ 前田貴美子

榎本 文代 神田美穂子 林 陽子 三屋 英俊 沢辺たけし

応募資格

「万象」同人・会員に限る

締切

令和7年6月末日到着分までを有効とする

宛先

〒二七〇一〇一一六 千葉県流山市中野久木五六三一一一

穂苅 照子（万象俳句賞事務局）

〈メール〉6845ubwn@jcom.zaq.ne.jp 〈電話〉〇九〇一二四二七一五一一七五

入賞発表

「万象」10月号 全国俳句大会で作品一席に万象俳句賞を贈る